対話としてのインタビュー

伊　賀　光　屋

中野卓は学生たちに常々「自分の目で見て，自分の頭で考えよ」と諭していた。この教えは，データの収集法と分析法について一言でその要点を述べたものだ。データ収集では，前半部分が，データ分析では後半部分が肝要である。データ収集では，与えられたものを可能な限り正確にかつ完全に記述すること，これがまず求められる。質的研究のデータ収集法の第一原理は，「見て聞け！」である。

では，何を見て，何を聞くのか。私が関心を持っているのは社会や集団や相互行為そのものではなく，それらが人々の意識の中でどのように呈示されているのかである。つまり，実在としての社会現象にではなく，意識の中に現れた社会現象に関心を持っている。つまり人々の生活世界における経験に関心がある。経験とは世界の中の事物や人々や出来事が意識に自らを呈示するままに意識の中で構成することに他ならない。経験とは世界の知り方であるともいえる。経験は世界への精神の投影（観念論の誤謬）でも，世界の意識への反映（唯物論の誤謬）でもなく，人と世界との遭遇，つまり人の存在への志向と存在の人への自己呈示によって生じるものである。経験とは事物や人々や出来事から受け取った感覚データではなく，それを「何か」として意味づけて受け取ることである。そして，その「何か」とは，個々の事物や人々や出来事の意味だけでなく，そこに現れるエイドスや本質としての意味も含んでいる。つまり，例えば，私が見ている物は，布で覆われた背もたれ，ふっくらとした座面，堅い木の肘当て，そして四本の足からなる物として経験されるだけでなく，座るための椅子としても経験されるのだ。

このように経験の本質的特徴は，志向性，つまりそれが「何か」についての経験であるという点にある。志向性のある場合には存在はまずもって手許にある様式（道具的存在様式）として現れる。ある人が意図をもって，ある事物や人々や出来事に接すれば，それらは必ず，その人の志向，否，パースペクティブに対して，レリヴァンスのある一面を呈示してくる。それがその人の事物や人々や出来事の経験の意味に他ならない。

研究者は研究対象者に，その人の経験とは独立した事物や人々や出来事の描写を求めるのではなく，事物や人々や出来事をどのようにして経験し，それがその人にどんな意味を持ったのかを問う。

「現象学的研究のデータは，経験が自身に呈示するままに記述したものであり，経験の外部に存在すると仮定されたものや行為を記述することではない。対象者からプロトコル（発話データ）を収集する中で，研究者は彼のレポートを独立の実在についての陳述としてではなく，彼らの経験の叙述だと考える。・・・現象学的データの収集の要点は，対象者たちの叙述が独立の実在に対応しているかどうかを確かめることではなく，探求している経験の叙述例を得るということだ。現象学的研究に必要なプロトコルとはある人が当該の経験をしているときに，その人の意識の中に存在していることの叙述であり，現象学的還元がそれを保証するための手続きである。・・・こうした現象学的プロトコルを生み出すためには，対象者たちに，自身の経験に意識を向け直してもらう必要がある。だから，『何が起こりましたか』ではなく，『何を経験されましたか』あるいは『それはあなたにとってどのようなことでしたか』と聞く必要がある。」（E.D.Polkinghorne;1989:50）

人々自身が経験したとおりの世界を研究者が叙述するためには，彼らの生活世界を研究者自らが直接的・

2009.11. 5　受理

共在的に見る必要がある。また人々自身の視点からその経験を理解するためには，彼らがその経験をどのように語るかを聞かなければならない。直接的・共在的に見る方法が参与観察法であり，人々自身の語りを引き出す方法が質的インタビュー法である。

図１に示すように，**参与観察**では研究者（研究者Ａ）は研究対象者の「認識の共同体」の一員となって対象者たちと同じパースペクティブから彼らの生活世界の中に現れる事物，人々，出来事を経験する。

非参与観察では研究者（研究者Ｃ）は研究対象者の「認識の共同体」の外側に立って観察していることに気づかれないように彼らの行動や発言を記録し測定する。また，同じように研究者（研究者Ｃ）が研究対象者の「認識の共同体」の外側に立つサーベイでは，構造化されたインタビュー（質問紙法）を用いて再現可能なデータを集める。いずれにせよ，研究者は自らの理論的パースペクティブに叶ったデータのみをスクリーニングして収集する。

インタビューは，得られたデータを量的分析にかけるか，それとも質的分析にかけるかによって，質問紙インタビューと質的インタビューに分かれると一般的には言われている。**質問紙インタビュー**は高度に**構造化**されたインタビューであり，質問と回答の選択肢が定型化されていて，聞き手（interviewer）が誰であれ，同一の対象者からは，同一つの回答が得られるように設計されている。また，予め検証すべき仮説が設定されていて，質問と回答の選択肢とは，その仮説に出てくる諸概念の操作的定義や尺度形成を予定して綿密に作られている。構造化されたインタビューでは，研究者（研究者Ｃ）の認識構造が回答に押しつけられ，回答者は自らの認識構造を調節しなければ回答できない。一方，研究者は回答者の回答を自らの認識枠組みの中に同化していくだけである。

これに対して，**質的インタビュー**は，回答する際に，話者（interviewee）が回答の内容を自由に述べ，また話者の言葉や用語法がそのまま生かされてデータとされる。そこで，質的インタビューでは，話者の認識構造をそのまま生かして，研究者（研究者Ｂ）の側で自らの認識構造を調節しながら，話者の認識構造に馴

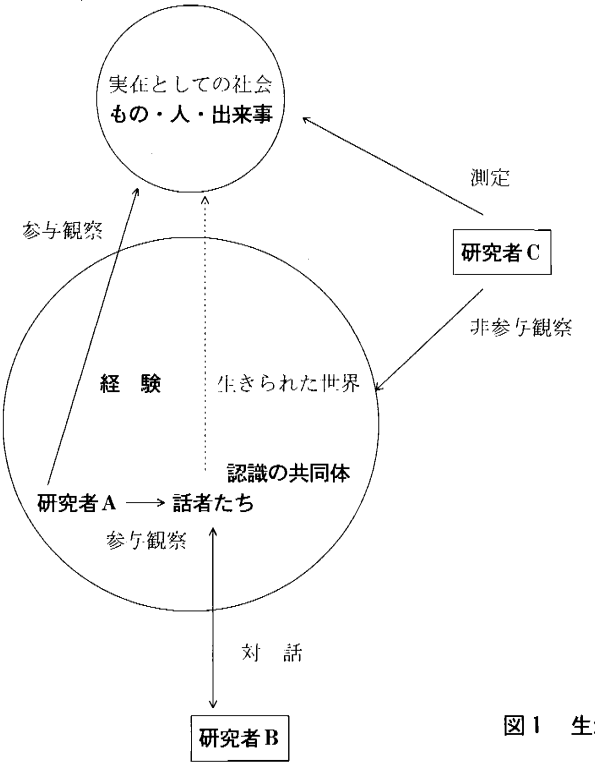

図１　生活世界に接近する諸方法

化していかなければならない。このようにして，質的インタビューでは研究者自身のパースペクティブと研究対象者のパースペクティブとの折り合いをつけていく。

質的インタビューは，**半構造化**法を用いる**「対話としてのインタビュー」**や**「テーマに焦点をあてたインタビュー」**や**「エピソード式インタビュー」**などと，**非構造化**法を用いる**「ナラティヴ・インタビュー」「ライフヒストリー・インタビュー」**などの二つに大別されてきた。

対話としてのインタビューではそれぞれ自身のパースペクティブをもつ研究者と研究対象者があるテーマについて語り合う中で，それぞれ世界の分節化の仕方（カテゴリー体系）をぶつけ合い，意味を校合し合い，そのように表現しても受け入れられると双方が思う言葉と意味を会話の中で妥協しながら決めていく。

また，**ナラティヴ・インタビュー**では研究者は自らの理論的パースペクティブから出発するものの，研究対象者のナラティヴ（語り）を理解するために自らのパースペクティブは括弧に入れ，研究対象者のパースペクティブを可能な限り受け入れていく。すなわち，自らの概念体系を捨て人々の用いる自然言語に精通し，かれらのバナキュラーな意味から彼らの経験を解釈する。

しかし，最近の現象学の立場に立った質的インタビューの方法には，図2に示すような四つのタイプのインタビューの方法があると考えた方がよい。まず，図2の縦軸は経験についての語りが誰の視点で，誰が関与して生まれるのかによって区分されている。上側のナラティヴは一人称の視点から話者の経験を再現することを目指す立場であって，聞き手の質問内容や聞き方の態度によって話者の自然な語りが阻害されないように，話者の語りに対する聞き手の影響を極力排除する方策が採用される。他方，下側の対話は話者と聞き手の間のそれぞれが前提を持ったまま，両者が共同して一つの話を生産しようとするものである。

横軸は何が再現あるいは生産されるかによって区分されている。右側では生活世界の叙述が目指され，特定の文脈，すなわちそこでその時経験されたことについての意識・意見（ドクサ）が記述される。横軸の左側では，いまとここに制約されずに，本質の把握や存在可能性への投企が目指され，ドクサではなく知（エピステーメ）が生まれる。

一人称の視点で生活世界の叙述を生み出す方法が**「ナラティヴ・インタビュー」**，一人称の視点で本質を把握させる方法が**「明示化インタビュー」**，二人称の視点で生活世界の叙述を生産する方法が**「対話として**

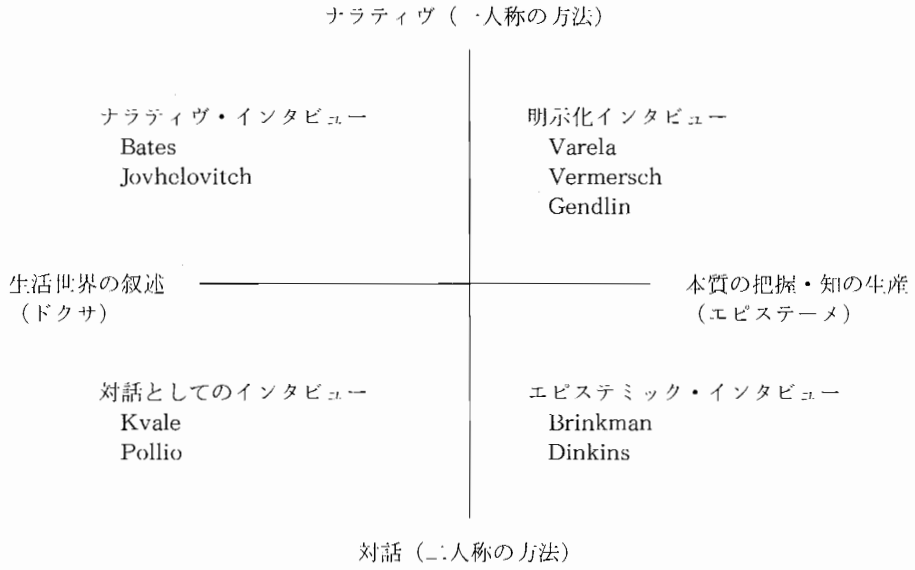

図2　インタビュー法の類型

のインタビュー」，そして二人称の視点で知の生産を目指すのが「**エピステミック・インタビュー**」である。本稿ではまず，第一節でナラティヴ・インタビュー，第二節で明示化インタビュー，第三節で対話としてのインタビュー，第四節でエピステミック・インタビューについて簡単に紹介し，第五節では，解釈学的現象学の立場からすると，対話としてのインタビューとエピステミック・インタビューを折衷した，テーマに焦点を当てたインタビューの方法が適した方法であることを論じる。

第一節　ナラティヴ・インタビュー

(1)　ナラティヴとは何か

物語は，神話からニュース記事に至るまでの多様な表現形式の中に見いだせる。

「物語は，神話，伝説，寓話，お話，小説，叙事詩，歴史，悲劇，ドラマ，コメディー，パントマイム，絵画，ステンドグラスの窓，映画，ニュース記事，会話などの中に存在する。さらに，このほとんど無限に多様な形式のもとで，物語はあらゆる時代，あらゆる場所，あらゆる社会に存在する。それは人類とともに始まり，物語をもたない人々はどこにも存在しないし，しなかった。」(R.Barthes 1993:251-2)

ストーリーを語ることは人間のコミュニケーションの基本形式であり，かつ普遍的な言語能力だと言われる (S.Jovchelovitch & M.W.Bauer, 2000:58)。**物語**とは，過去から現在に至る様々な出来事の中から，ある志向性をもって選ばれたレリヴァンスのある一連の出来事を配列し，生活世界をダイアクロニカルに構成する語り方の慣習である。コミュニティ，集団などが物語を共有する共同体となって，自らに特異な言葉や修辞や意味に基づく固有のパースペクティブを物語の中で保持している。だから，ある集団の物語を聞けば，その集団の世界の分節化の仕方や生活世界を構成する意味連関が明らかとなると Jovchelovitch らは言う。なぜならば，語り (narration) は，指標的陳述に満ちているからだと言うのだ。つまり，語りは個人的経験に言及し，具体的な出来事や行為に焦点を当てていて，語られる諸々の出来事と文脈の間には指標性（出来事が文脈の指標になる）と相互反映性（出来事は語りの中で構成されていく文脈＝筋によってその意味が定まっていくし，出来事の意味が定まるにつれて文脈は完成していく）が見られるというのだ。つまり，語りは諸々の出来事から，自らの志向性に基づいて特定の出来事を選び出し，それに意味を与え，世界を構成していく作業だというのだ。つまり集団はそれぞれ固有のプロットを構成する。

物語には，出来事に関するエピソードを年代的に配列したストーリーの次元と，諸々の出来事の全体を構成し，諸々の出来事を意味づけるプロットの次元がある。プロットは，経験の流れの中から一定の時間的広がりを区切り，出来事に始まりと終わりを与える。また，プロットは物語の中にどの出来事を入れるのか，それらの出来事をどのように並べるのか，そしてそれらの出来事が物語の中でどのような意味を持つのかを決める基準を与える。物語の理解とはこのプロット，すなわち経験の筋立てを理解することであるという。

(2)　ナラティヴ・インタビューの特徴

ナラティヴ・インタビューには次のような特徴があると言われる。

１．一般のインタビューの中で広く用いられている質疑応答式のシェマを否定する。質疑応答式シェマでは，インタビューする人がインタビューに応じる人に対して三重の押しつけをするという。

①　自ら選択したテーマをトピックスとして押しつける。

②　質問の配列順（話す話題の順序＝プロットの展開法）を押しつける。

③　自らの言語（世界の分節化法）で作った質問文を押しつける。

こうした押しつけによって，話者は自らのパースペクティブで語ることが出来なくなる。

２．そこで，ナラティヴ・インタビューでは，特殊なタイプの日常のコミュニケーション方法，すなわち「ストーリーの語りと聞き」という方法を用いる。ここでは語りは自己生成シェマ (self-generating schema) に従って展開される。

３．この技法を支える前提となる考え方は相対主義的で言語基底的認識論である。つまり，

① 人々はそれぞれ異なるパースペクティブで世界を見ている。だからインタビューする人とインタビューされる人との間でも，また複数のインタビューされる人々の間でもパースペクティブは異なりうる。

② パースペクティブを支えているのは言語である。どのような言葉を用いるかということは，世界をどのように分節化し，分節化されたものどうしをどのように関連づけ，それらをどのように意味づけるのかと言うことに等しい。

だから，ナラティヴ・インタビューを行う場合，インタビューアーは自らの言語形式を押しつけないだけでなく，話者の使うバナキュラーな言語をまず習得し，それぞれの話者で同じ言葉を違う意味で用いたり，違う言葉で同じ意味を指している場合を認識し，またそれぞれの話者がどの視点で出来事や世界を語っているのかを理解しなければならないとされる。この考え方は，リアリティは一人称の形で存在し，インタビューアーによって発見されると言う考え方であり，解釈学的現象学の考え方，すなわちリアリティは対話の中で一人称・二人称関係の中で再構築されると言う考え方とは相容れない。

⑶ ナラティヴ・インタビューの進行とルール

ナラティヴ・インタビューは①準備段階，②着手段階，③主要な語りの段階，④質問の段階，⑤締めくくりの話し合いの段階の五つの段階からなり，それぞれの段階で，ストーリー・シェマを活性化し，語りをスムーズに展開させるためのルールがあるという。

A．準備段階

① フィールドに精通するために，予備的な探査を行う。記録の解読や出来事についてのインフォーマルな解説やうわさ話を聞き取ることなどが含まれる。

② 次に，研究者の問題関心に沿った外在的な質問を予備的に列挙しておく。これは研究者の枠組みや概念を用いた質問である。

B．着手段階

情報提供者に最初に語ってもらうトッピクを定式化する。その際に，

① 最初のトピックは情報提供者が経験したことを選ぶ。

② 最初のトピックは情報提供者個人にも社会的にも重要なものを選ぶ。

③ そのトピックに対する情報提供者の関心やかけた労力については言及しない。これは情報提供者に，最初から特定の立場に立って話してもらうことを避けるためである。

④ トピックは網を広げておいて，情報提供者が最初の事態から現在に至るまでのストーリーを自由に展開できるようにするためである。

⑤ トピックの定式化では，日時，人の名前，場所などに言及しないようにする。それはストーリーの文脈（プロット）の指標となるので，それらに言及するとストーリーは聞き手が予め組み立ててしまうことになるからだ。こうした指標は話者自身が自らのレリヴァンス判断で選んでいくのを待たなければならないという。

C．主要な語りの段階

① 話の腰を折らない。話者が一旦語り始めたら，ストリーが終わったことを示す明確な締めくくり（例えば，「・・・と言うことがありました」など）がなされるまで，中断したり，嘴を入れない。

② 話が自動的に生成するように，積極的に傾聴し，言語以外のあるいは疑似発語的な支援（眼差しや，「えなんですって！」「なるほど」「分かりました」などの発声）を示して，語りを促す。

③ ストーリーが終わったことを示す締めくくりがあったら，「他にお話されたいことはもうありませんか」などと言って語りが終了していることを確認する。」

D．質問段階

ストーリーのギャップを埋めるために，内在的な質問をする。

① 「それからどうなりましたか」とか「○○って何のことですか」といった質問のみをして，何故という質問はしない。また，意見，態度，原因については直接聞かない。これらは自発的に語られたものだけを**C．主要な語りの段階**で記録しておく。

② **A．準備段階**で研究者の視点から立てた外在的質問を話者の言葉に翻訳し，話者の視点から読み替え

た内在的質問に変換して質問する。

③　反対尋問にならないように，語られたことの中で見られた矛盾を指摘しない。

E．締めくくりの話し合いの段階

①　録音などの記録をとっている作業を止める。

②　「何故」型の質問はこの段階ではしてもよい。

③　インタビューの場を離れたら直ちに，記憶に残っていることを記録する。

ナラティヴ・インタビューでは，以上のルールを守って，話者が自身の自然的態度で語る自らの生活経験を汚染することなくそのままの姿で，収集する。次に，こうした立場でライフヒストリー法のインタビューについて詳述しているウェングラフの伝記的物語解釈法のインタビューについてみてみよう。

(4)　伝記的物語解釈法のインタビュー

BNIM（Biographic-Narrative Interpretive Method：T．Wengraf，2001）では三つの部分からなるインタビューを実施する。これを三つのサブセッション構造といい，次の様な流れになっている。

A　最初の単一の物語質問と最初の語り。

語りを促すが，方向づけや口を挟むことはしない。必要なら単一の物語質問をする。第二サブセッションに備えて話題をノートに取る。

↓

B　語られた話題についてのみ質問する。

第一サブセッションで出た話題についてのみ，語られた話題順に，話者の言葉を用いて質問する。

↓

C　第一・第二サブセッションで得られた素材の分析後に再びインタビューを実施し，**研究者が関心をもった点や理論に関する質問をする。**

(A)　第一サブセッション：単一の物語質問と語り

第一のサブセッションでは**単一の物語質問 SQUIN**（**S**ingle **QU**estion aimed at **I**nducing **N**arrative）のみをして，後は話者に話し続けてもらう。単一の物語質問の一例としては，たとえば，

「私は・・・（論題）・・・に興味を持っています。あなたの人生についてお話をお聞かせください。これまでにあったあなたにとって重要な出来事や体験をすべてお話ください。好きなところから話し始めて下さい。必要なだけ時間をかけてお話下さい。私は黙ってお話をお聞きし，ノートを取らせて頂きます。お話が全部終わってから質問させて頂きます。」

といった質問が適当である。単一の物語質問を実行する際の原則として次のことが強調されている。

①　聞き手に気兼ねなく話者が「率直に」語れるように支援する原則。

②　概念的な変更可能性の原則，すなわち「検証すべき」仮説をもたない。

③　コミュニケーションの原則。日常会話の規則に従うが，積極的に聞く事が含まれる。

④　話者のゲシュタルト（経験の統一的全体）の自由な展開や開示を促す原則。インタビューの間に，話者がなぜそのように語っているのかを理解しようと試みない。とりわけ理由を発見しようとして口を挟んだり，明確にしようとして話を中断させたりしない。質問や応答で語りを妨害しない事が重要である。

⑤　最初のセッションで用いられた手掛かりとなる言葉を用いて，語られた順に，次のセッションでする質問を定式化しておけ。

第一の「単一の物語質問」のサブセッションでは，SQUIN の後ではいっさい質問せず，話者が SQUIN に答えてくれるようにサポートする。ここでの話は５分位で終わる場合もあれば１時間位続く場合もある。その間，聞き手は話者が言及した話題について，話者が使った手がかりとなる言葉をそのまま用いて簡単なノートを取る。このノートは SHEIOT ノートと呼ばれ，ここでは決して言い換えてはならず，また何から

何までノートに取るのではなく２～３のキーワード（手がかりとなる言葉）を書き綴っていく。これは，第二サブセッションでの質問を組み立てるのに用いるのだから，長々と余分なことは書かない。

(B) 第二サブセッション：語られたことについての質問と回答

第一の語りに引き続いて行われる質問のサブセッションでは，SHEIOT ノートに基づいて質問していく。この際に守らなければならない点は以下の通りである。

① 物語に向けられた質問だけをする。他のタイプの質問はしない。

② 話者が話した話題についてのみ質問する。聞き手が興味をもっている話題を問うのではない。外部から質問を持ち込むのではなく話者の話の中から質問する。

③ 手がかりとなる言葉を用いて，またそれらが出てきた順に話された話題について質問する。

第二サブセッションでは複数の作業を同時に行わなければならない。まず，物語に向けられた質問をしながら話者の反応を観察する。また，回答について再び SHEIOT ノートを付け，必要ならさらに質問する。許された時間内にどの質問の回答にどのくらい時間割り当てられるか見当をつけながら質問を進めていく。ここでしてならない作業は，物語を解釈したり，予め考えていた仮説が検証されるような話がなされたのか考え，そのための質問をすることだ。そうすれば聞き手の問題関心に沿った語りが展開され，話者の問題関心に沿った語りはなされない。話者にとって何が関連性（relevance）があるのか，どの表現や強調点が特定の話題に満ちているのか，を考えることに集中しなければならない。**話者の語りのレリバンス・システムを出現させるようにする**のだ。第二サブセッションは２～３時間程度で終わることが多い。

(C) 第三サブセッション：問題関心にそった質問と回答

第三の随意の追跡インタビューは，データの分析，解釈過程で生じた疑問を解消するためののインタビューである。この時の注意点は次の点だ。

① 物語に関する質問が残っていればそれをまず聞く。それ以外の質問は後回しにする。

② １～２ヶ月間を開けて，トランスクリプトを検討し，質問を準備する。また，何らかの初期的仮説が浮上してきたら，それを検証する質問を考える。

このように，BNIM インタビューでは，話者のゲシュタルト（経験の統一的全体）を開示させる作業（第一，第二サブセッション）をまず行って，それが完全になされた時点で初めて解釈や仮説の浮上が行われ聞き手の問題関心による質問（第三サブセッションの②）が許される。

最後に**進んで聞く姿勢 (active listening)** について述べよう。これには積極的な面と消極的な面がある。

積極的な面

① ノンバーバル・コミュニケーションで語りやすくなるように支援する。口は挟まないが目つき，顔面表情，姿勢，頷きなどで話を聞いていることを表現する。

② 思い出した事で情緒的になった時に，共感的に支援する。

③ 最初の語りの最中に，「・・・こういうことですね」「それは・・・ですね」などと言い換えない。」

消極的な面

① 慰めの言葉を口に出さない。

② 助言を与えない。

③ 口を挟まない。

④ 自分の考えや体験を押しつけない（「私の場合は・・・でした」などと言わない）。

⑤ 話の背景を聞いたり，明確化するように求めない（グラウンデッド・セオリーとの違い）

ウェングラフの方法は，話者の話の構成に調査者の諸前提が反映されないように，話者の話を引き起こすための最小限のきっかけとなる質問以外は，最初の段階でしないのが特徴である。

(5) 物語の分析法

最後に，Schütze (1977;1983) の物語分析法について述べておこう。

第一段階：口頭で述べられたことを詳細かつ高品質で書写する。

第二段階：テキストを指標的素材と非指標的素材に分ける。

指標的素材は「誰が，何を，何時，何処で，何故行った」かについて具体的に言及している。これはバルトの枢軸機能体，プロップの機能，トマシェフスキーのファーブラ，トドロフのイストワールにあたる。

非指標的素材は「出来事」を超えた価値判断，そして「生活の知恵」を表現している。非指標的素材は次の二つに分かれる。

a）**記述**：出来事がどのように感じられ経験されたのかについて，またそれらに付着した価値や意見について，そして通常のことやありふれたことについて言及している部分。

b）**議論**：ストリーの中で当然と考えられていないことを正当化したり，その出来事についての一般的理論や概念の点から反省している部分。

第三段階：テクストのすべての指標的成分を活用して，各個人にとっての諸出来事の順序を分析する。

第四段階：テクストの非指標的次元は，「知識分析」にかけられる。語り手の意見や概念，理論などは語り手の操作的理論として再構築され，それは語り手の自己理解を表すものとして分析される。

第五段階：個々の軌跡をクラスター化したり，比較したりする。

第六段階：極端な事例を比較して，個々の軌跡を文脈の中に位置づけ，個々の軌跡の類似性を確認する。これによって，集合的軌跡を認識する。

第二節　明示化インタビュー

明示化インタビューでは，**一人称の方法**とそれを補完する二人称のエキスパートによる媒介・訓練が行われる。これは，話者に自身の主観的経験について気づかせ，叙述させるための方法である。つまり，話者が自身の諸前提，先入観を括弧入れして，自ら現象学的還元を行うことで主観的経験に到達し，さらには形相的還元を加えて自身の主観的経験から本質をえぐり出すのを援助し促進するインタビュー技法である。つまり，話者自身に内観法を実行してもらい，経験の本質的部分を本人に気づかせ叙述させる方法といえる。内観法や内省法は，社会学や人類学における参与観察の方法に対応していて，一人称の体験を直接実行しようとするものだ。これは，形相的還元の方法である「想像上の変更」を話者に実行してもらうことに他ならない。想像上の変更とは，たとえばある椅子を観察し，それが背もたれ，座面，脚などからなっていた場合，こうした知覚や思考の要素のうち，まず脚を取ってみて，想像上のイメージが，未だに椅子として経験されるか試してみることである。このような変更を，背もたれ，座面にも加え，もしそうした変更をするともはや椅子として経験されなくなった場合，その要素は椅子の本質的経験の部分とされる。

この方法は，話者が，自らが属する言語共同体や文化共同体の中で培われた諸前提や先入観に基づいて，自らの経験を物語ることを阻止し，彼らに自らの諸前提や先入観を括弧入れさせ，自らの意識のプロセスに気づかせ，経験の本質部分を把握させる方法である。これには，E.Gendlin（2009）の Focusing の方法や，P.Vermersch（1994）の explicitation interview 法（明示化インタビュー），そして C.Petitmengin（2006）の一人称のデータ収集のためのインタビュー法などがある。

F.J.Varela，& J.Shear（1999b）によれば，**一人称のデータ**とは，主体の視点を，文法的には一人称で「私は・・・」という形式で表現されたデータのことである。そして，**二人称の方法**とは一人称のデータを別の人（「あなた」や「汝」）が収集する方法だと言われる。彼らの唱える神経現象学では，脳電図で把握した脳神経細胞間の発火パターンとその直後の意識内容との関係を知ることが意識の科学的現象学的研究の課題である。そこで，被験者に自身の物語を語らせず，また当たり前と思っている筋立てを留保させ，自らの身体と心で起こっていることを想起させ，叙述させる事が肝要である。研究者は二人称の立場から，一人称の被験者が括弧入れと現象学的還元を実行出来るように援助し，かれらが意識的経験を再現（evocation）できるように媒介者になる。

C.Petitmengin（2006）は，話者が自身の主観的経験に気づきにくい理由を六つ挙げている。

① **注意の散漫**：注意は常に散漫で，捉えようとしている主観的経験からは逸れた様々な考えが湧いてくる。

② **意識対象への没頭**：所与の活動に注意を集中している場合でも，目的や達成結果や「何か」に心を奪

われ，その目的のをどのように達成しているのかにほとんど気づかない。

③ **経験と表象の混同**：経験をその表象と混同し，経験を叙述するのではなく，その経験の表象を叙述する。

我々は自分たちの認知プロセスがどのように生じるのかを知らないばかりか，知っていると信じていて，認知活動の誤った表象を抱いている。それは我々の文化的環境に特異な信念に対応し，言語やメタファーといった我々の経験を構造化するものによって伝えられ強化される。そしてこれらの表象にかみ合わない経験の部分は捨象され，観察しうるものは近くによらず既に理解していることによって読み取られていく。

④ **経験の層化された諸次元の把握の困難**：主観的経験は層化されていて，思考（精神の自身との対話），内的イメージ，感情，主観的経験の絶え間ない流れを構成する内的な作動（比較，検証，診断など）の連続，などからなり，それぞれの次元を捉えるためには特定の「注意の向け方」が必要であるが，これを習得するには特別の訓練が要る。

⑤ **観察精度の把握の困難**：これらの各次元をどれくらいの精度で観察すべきか分からない。

⑥ **リアルタイムでの経験の把握の困難**：主観的経験には即時的に接近できず，回想的に叙述せざるを得ない。

こうした理由から，主観的経験は気づきにくく，また叙述しにくい。そこで，インタビューの中で，二人称の仲介者たる聞き手が，これらの困難を克服するための諸方策を加えながら，話者に自身の主観的経験に気づかせ，叙述できるように支援する。

(1) 注意を集中させるための方策

注意を集中させる為の方策としては，まず，インタビューの開始時点で，○○の経験について叙述していただくのがこのインタビューの目的であると明確に述べる事が挙げられている。このように，インタビューに文脈を与えることで，話者はその経験に持続的に注意を集中できるというのだ。これは，インタビューのテーマをインタビューアーが決める事に他ならない。

しかし，これだけでは，その経験を叙述せず，その経験についてのコメント，評価，判断を加えたり，その時々の話者の関心によりテーマから逸脱することは避けられないという。そこで補完的に，Focusing 法などを用いて話者の注意を安定させる。

注意を安定させる第二の手段として，話者が言ったことをインタビューアーが定期的に言い換え，話者にそのの正確さを点検してもらう方法が挙げれれている。言い換えによって，逸れた話が元に戻されるというのだ。

四番目に挙げられるのは，はっきりと○○の経験に戻って話をしてくださいと言うことだ。

五番目は，「直接的言及」（Gendlin，1962）を用いる方法である。これは，話者が，意識の中に現れてくることを，たとえば「この感じ」，「それ」，「この変なこと」などの用語や，様々なノンバーバルなシンボルで表現し，それを経験の流れから切り離して捉えている場合，インタビューアーがそれを指摘し，その感情や心の作用に話者が注意を集中できるようにする方法である。

(2) 意識対象から意識過程へ注意を向け直すための方策

経験の前反省的部分に気づくことには，その行為をどのようにしてしようかということを意識せず，またそうした意識がないことさえ意識せずに行為する習慣的態度を捨てることが含まれる。主観的経験に気づく為には，心を奪われている「何か」から「どのように」に注意を向け直す必要がある。これが現象学的転換であり，意識に現れたものから，これらのものが現れる主観的様式に注意を転換することだ。知覚されたものから知覚行為へ，イメージされたものからイメージする行為へ，記憶対象から記憶するという行為へと注意を移す。このように内容からプロセスへ注意を転換することで，直接的意識から内省的意識への転換が可能になると言う。

この転換を促すために，明示化インタビューの方法が用いられる。

話者の前反省的な内部プロセスに気づかせる為には，「何故・・・」型の質問を避け，「どのように・・・」型の質問をすべきだと言われる。何故型の質問は，話者の注意を主観的経験のプロセスから目的物や抽象的

考察の叙述へと逸らしてしまうというのだ。しかし，彼の主観的経験のプロセスを意識させるために良く採用されている「口に出して考えさせる」方法は「何か」から「どのように」への注意の転換をもたらさないという。それはたかだかこの作業を行っているときの話者の内的対話（思考）を収集しているに過ぎず，主観的経験の一部しか捉えられない。適切な質問の仕方としては，例えば「それを成し遂げるのに，何をしたのですか。」「どうやってそれを始めましたか」，「それが為し終えたと思えたのはどのようにして分かったのですか」などと聞くのがいいとされる。

(3)　表象から経験へ注意を向け直すための方策

話者が，自分が行っていると思っていることや行っているとイメージしていることではなく，実際に行っていることを叙述出来るようにするためには，一般的叙述から時空間の中に位置づけられた特定の状況の叙述へと転換できるようにしなければならない。「一般的な経験」をする者などいないのだ。生きられた経験は必ず一つだけの経験である。「ある人の人生のある一点での生きられた経験でないものは生きられた経験とは言われない」（P.Vermersch，1997a;1997b）もし，「それはどのように行ったのか」と質問すれば，話者は自分の行っていることについての表象に対応する極めて一般的な叙述しかしないだろう。話者は気づかないままにこれまでに習得したルールや理論的知識を叙述するだろう。それでは，生きられた経験の前内省的次元は現れず，抽象的で貧困な叙述しか得られない。話者は自らの認識の共同体で常識になっているストーリーを展開するだろう。それを阻止して，生きられた経験そのものを叙述してもらうには，「いつ，どこで，だれが，なにをしたのか」を問わなければならない。そして，単一の経験を再現（evocation）することから，表象や理論的知識を用いた叙述に逃避すれば，彼の言葉を遮り，単一の経験に引き戻さなければならないとされる。

それでは，この一つだけの経験はどのようにして選ぶのか。探求している認知プロセスが容易に再現できる場合，研究者は話者が，ここでいま，そのプロセスを実行できるようにする方法を考案することが出来る。そしてその後に，このプロセスをどのように実行したのかについて質問する。例えば，明示化法を訓練する場合，学生に多様な認知的課題（記憶すること，観察すること，想像すること，問題を解くこと）を与え，それを実行した後に，それについての解説をしてもらう。神経現象学の方法も同様である。話者に認知的課題を与え，彼の脳波図を記録し，この課題を実行した直後に主観的経験の叙述を収集する方法が採られる。

研究している経験が思いのまま再現できない場合には，研究者は話者に過去にその経験が起きた特定の時点を思い出してもらう（回想法）。逆に，主観的経験のプロセスが何時間，何日間も続く場合には，一つか数回の特定の瞬間を選んでそのときの経験を叙述してもらうことになるという。

社会学の場合には，経験の認知プロセスが問題になるのではなく，社会的プロセス（相互行為のプロセス）を再現することになる。グループダイナミクスは神経現象学と同様な実験と現象学記述を組み合わせた方法を採りうる。またライフヒストリー法は回想法を行っている。ただし，ライフヒストリー法は特定の時点での相互行為の回想にとどまらず，ナラティヴによって話者は慣習，ルール，価値，規範の叙述をすることがむしろ奨励され，また自然的態度でレリヴァンスのある出来事のみを選択してストーリーを組み立てるのであるから話者自身が現象学的還元を行うように設定されているのではない。

(4)　経験の様々な次元に注意を向け，正確に焦点を当てて叙述させる方策

先に挙げた四番目と五番目の困難に対しては，次のような方策が採られる。まず主観的経験の再現が安定したら，インタビューアーは適切な質問をして，話者に彼の経験の様々な次元を意識させる。そのために有効なプロセスは，インタビューを始める前に，話者がこれらの次元に気づく為の訓練をちょっとやってみることだ。例えば，休日の記憶を蘇らせ，その記憶の，視覚的，聴覚的，運動感覚的，情緒的，臭覚的，味覚的次元を順繰りに述べてもらう。そうすると，インタビューの中で，経験の様々な次元に気づく注意の集中した立場に立てると言うのだ。

また，インタビューアーはインタビューの中で，話者の主観的次元のダイアクロニカルな次元（経験流）とシンクロニカルな次元（経験の空間的配置構造）を知ることが出来る。そこで，これらに基づいて，話者の注意を，経験のそれぞれの時点の経験流のより深い叙述を引き出すように援助できたり，話者が経験空間

を目前にしている場合やその経験空間の中に位置してそれらを見ている場合のそれぞれのメンタル・イメージのいずれかを引き出すように援助することが出来るという。

また，それぞれの経験の次元に正確に焦点を当てることは難しいが，仲介者としての熟達したインタビューアーが，これれの次元の記述的カテゴリーについての知識に基づいて，話者が把握していない各次元の経験の深みにまで沈潜し，それを正確に叙述出来るように促すことが出来るという。

（5） 生きられた経験へ回想的に接近するための方策

探求している経験がほんの少し前に起ころうと，数年前に起ころうと，それらには回想法的な接近が必要になる。だから，インタビューアーは話者に過去の経験を「蘇らせる」（re-enactment）ように導かなければならない。この技法は，Neuro-Linguistic Programing modelling intervew でも明示化インタビューでも鍵となっている。P.Vermersch（1994）はその理論的モデルが，感情的記憶のモデルだと説明している。この感情的記憶は「具体的記憶」（Gusdorf，1950），「逸話的記憶」（Cohen，1989），「自伝的記憶」（Neisser，1982）とも呼ばれている。この理論は，特殊な生きられた経験と結びつきのない概念的知識に基づく知的記憶を，鮮やかで欲情に満ち生き生きとした密度で過去を再発見させる感情的記憶と対比している。感情的記憶のもとで，我々は，過去との直接的な一致を経験し，過去をあたかも現在のように再び生き直す。この記憶の特徴は，心ならずも蘇ると言うことだといわれる。つまり，それは推論的思考のイニシアチブのもとでは起こらず，自然に，そして通常は，感覚的引き金の直後に起こる。だから，記憶というものは慎重に狙って引き起こすことは出来ない。しかし，この経験と結びつく感覚性を再発見することで，その出現を間接的に準備することは出来るという。

インタビューの場面で，話者に過去を具体的に再現するよう導くことで，インタビューアーは，彼が経験の空間的・時間的文脈（いつ，どこで，だれと）をその経験と結びつく正確な視覚的，聴覚的，触覚的，運動感覚的，臭覚的，味覚的感覚と共に再発見し，過去の経験が生き直される。

こうなると，それまで過去時制で語られていた経験が，現在形で語られ始めると言った変化まで見られることがあるという。

第三節　対話としてのインタビュー

(1) 旅人としてのインタビュー

対話としてのインタビューを標榜するのはS.Kvale（1983，2009）やH.R.Pollio，et al（2006）である。鉱夫ではなく旅人として対話型インタビューアーを目指すS.Kvale（1983，2009）は，解釈学的現象学の視点からなされる対話としてのインタビューを質的調査インタビュー（qualitative interview，qualitative-research interview）と呼んでいる。これは自由な会話でも，高度に構造化された質問紙インタビューでもなく，特定の諸テーマに焦点を当てた綿密ないくつかの質問を含むインタビュー手引書に従って実行される対話としての半構造化インタビューである。これは，A.Schorn（2000）がいう「テーマに焦点をあてたインタビュー」（theme-centered interview）に等しい。

S.Kvale（1983）によれば，「対話としてのインタビュー」における理解の仕方には次の12の特徴があるという。

① **生活世界に焦点を当てる**：このインタビューは話者の生活世界に焦点を当てている。そして，話者が体験し，それに向かって生きようとしている，中心的諸テーマ（＝意味づけられた経験）を記述し理解することが目的である。つまり，テーマに焦点を当てたインタビューは T.Wengraf（2001）らの BNIM（Biographic-Narrative Interpretive Method）が行うインタビューと異なり，テーマに焦点を当てているのであって，特定の人物に焦点を当てているのではない。

② **意味を理解する**：インタビューの中では事実についても触れられるであろうが，主に焦点を当てられるのは話者の経験の意味である。つまり，テーマに焦点を当てたインタビューは事実としての生活世界の出来事よりも，それらがどのように経験されたのか，言い換えると話者が中心的テーマに与えた意味を記述し，理解しようとする。そして，語られた意味を理解するたまには，言葉だけでなく，顔面表情や身体動作など

も注意深く観察して，テクストの「行間で言われたこと」も読み取る必要がある。

③　**質的に**：テーマに焦点を当てたインタビューは，話者の生活世界の様々な質的側面から数多くの微妙な差異を含む記述を得ようとする。

④　**記述する**：テーマに焦点を当てたインタビューは，まず解釈の加えられていない記述を得ることを目的とする。話者が経験し，感じたこと，そしてどのように行為したかを可能な限り精密に記述する。

⑤　**特異性に着目する**：テーマに焦点を当てたインタビューは，話者の世界における一連の特異な諸状況や諸行為を記述する。探求されるのは，一般的な意見ではない。つまり，一般的な状況に対するインパーソナルな質問をするのではなく，具体的で個別的な特異な状況に置ける経験についてのパーソナルな質問をする。

⑥　**無前提で聞く**：話者の生活世界におけるテーマに関連した豊かで無前提的な記述を集めるために，聞き手は語られたことを既成の解釈図式やカテゴリーに鋳流すのではなく，自らの前提や仮説に批判的となり，話者の言ったことの中にある新しい予想していなかった現象を受け入れ，それに合わせて自らの解釈図式やカテゴリーの方を鋳直す。

これは「無前提性」というよりも「開かれている」と言い直した方が適切であろう。解釈学的現象学の立場では，現象学的還元は不能とされ，むしろ前提を自覚して地平の融合を図ることが主張されているからだ。

⑦　**焦点を絞る**：テーマに焦点を当てたインタビューでは，話者の生活世界の特定のテーマに焦点が当てられ，聞き手はそのテーマの方に話者の語りを誘導するが，そのテーマに関して何が重要な次元なのか，どのような順序で語るのかなどについては，話者の決定にゆだねる。だから，最初の「・・・についてお聞きしたいのですが・・・」といった質問をした後には，話の流れを折らないように，また話が更に展開するように分からなかった言葉を問うたり，「成る程・・・」といった相槌を打つだけに止める。

⑧　**話者の陳述には曖昧さが含まれる**：話者は色々な解釈が可能な表現を含む陳述をしたり，インタビューの間に相反する陳述をしたりすることがあるが，こうした表現をそのまま正確に記述する必要がある。そうした曖昧さや矛盾があるのは，話者の思い違いやコミュニケーション能力の欠如による場合だけでなく，話者の住む世界の客観的矛盾を反映している場合があるからである。それらは分析の段階で，解釈を加えなければならない。

⑨　**話者の陳述の変化を生かす**：また，話者はインタビューの中で，あるテーマの叙述や意味を変化させることがある。こうした変化は話者が語りながら，そのテーマに新しい意味を見いだしたり，意識していなかったことを意識し出すことによって生じることがある。こうした変化はそのまま記述しなければならない。対話式インタビューが聞き手と話者の共同制作であることはこの点にも現れる。

⑩　**聞き手には感受性が必要である**：別々の聞き手が同じインタビュー手引書を用いてインタビューしても，聞き手の感受性の違いによって，対話の向かう方向は変わり，同一のインタビューが再現されることはない。だから，聞き手は十分な予備知識を持ち，訓練や幅広い生活経験によって磨かれた感受性を身につけ，その上で「無知を慎重にかつ自覚的に装い」，聞き手が自発的に語りを自己編集できるように，「能動的な聞き」を実行しなければならない。

⑪　**インタビューは相互行為の場である**：インタビューは聞き手と話者の相互作用の場である。この相互行為は，認知レベルでも情緒レベルでも双方に影響を与える。だから，話者の生活世界の経験の意味づけには聞き手が関与している。意味は両者の協議によって定まっていく。つまり，インタビューはテクストの共同制作行為の場であるということだ。

⑫　**インタビューは積極的体験の場である**：インタビューは興味深いテーマについて二人の人間が語り合うという，一つの経験の場を積極的に与えるものである。

このように，**「テーマに焦点を当てたインタビュー」**は，話者の**生活世界**の**意味**を理解するために，その話者に**特異**な生活世界の**質的**側面を**記述**する。聞き取る際に，聞き手は特定のテーマに絞って，**無前提**で，**感受性**を持って聞く。話者の陳述には**曖昧**さや話の**変化**が含まれるが，それをそのまま聞き取る。このようにしてなされる対話としてのインタビューは**相互行為**の場であり，また一つの**積極的**な**体験**の場でもある。

対話としてのインタビューのなかでは，聞き手がテーマを設定し，話者がトピックを選定しながら語りを展開する。対話としての解釈学的現象学のインタビューでは，論題を設定するための「・・・のことについ

て伺いたいのですが，その経験についてお話ください」といった最初の語りを促す質問以外は，話者の選んだ語りの展開にそって，話者の話したことがよく分からない場合や，知らない言葉で話した場合や，もっと詳しく聞きたい場合に，話者の話が一段落したときに，「今・・・とおっしゃったことは何ですか」「それはどういうことですか」「そのときどう思われましたか」といった，話をさらに展開したり深めてもらうための質問を挟みながら，話者に話の展開の主導権を与えて自らの経験や出来事の意味づけ述べてもらう。そして避けるべき質問は「それは何故ですか」といった経験の叙述から理論的議論へと対話を転換してしまうような質問だと言われる（Thompson, Locander, & Pollio, 1989）。このように，対話としての解釈学的現象学のインタビューは最初のテーマ設定以外の質問は予め用意せず，話者の話の展開に沿って，その中で必要と感じた質問を行うという方法がとられる。これはまさに，日常生活の中で，**相手の話を聞き出すときに採っている会話の戦略（能動的な聞き）**に他ならない。しかしまた，こうした会話が円滑に進むためには，話者が語るであろうことの大半について予め知っていなければならないし，また，知っていても話者がどのような新しい意味づけを行ってもそれを聞き逃すことの無いように，無知を慎重にかつ自覚的に装う必要がある。

従来の主客二元論の立場では，調査対象者が内に秘めている主観的経験の内的表象を，歪み無く外部化することが，質的研究者の役割だとされてきた。そして対話の中の「尋ねる」行為自体が，その内的表象を歪めて外部化する原因だとされる。

しかし，対話的インタビューでは，話者は単なる調査対象者ではなく，また聞き手も話者の独白の単なる受容者ではない。対話の中で話者は聞き手と共同で，自らの経験を意味づけている。つまり，対話の中で，話者の経験は意味を持ったリアリティとして共同制作されていくのだ。

そこで，解釈学的現象学のインタビューでは，標準的インタビューとは異なったいくつかの方針が採用される。

第一に，用いる用語は価値自由な中立的用語でなければならないと言うことはない。そもそも，聞き手にとって価値自由と思われる用語を用いても，話者にとってはそうは受け取られない用語は多々ある。例えば，Hagan は，福祉手当を受けている母親に「家族計画」について聞こうと思って「子どもは計画的に生みましたか？」と問うても，話者にとっては「何で無責任に何人も子どもを産んだのか」という非難に聞こえることを指摘している。

第二に，インタビューに慣れてもらうために，当たり障りのないインパーソナルな質問から始め，パーソナルな質問は後回しにせよと言われる。しかし，聞き手にとってインパーソナルと思えても話者にとってはパーソナルな質問になるものもある。また，普通の会話ではパーソナルな質問をしても問題にはならないから，そうした配慮は必要ない。むしろ話者との関係を親密にして，そうした質問を出来るようにし，また話者が仲間に話すのと同じような気分で違和感無く聞き手に話せるように，聞き手は話者の生活世界や聞きたいテーマに関する彼らの経験に精通していなければならない。

第三に，話者の発言を肯定したり，否定したりする反応（頷き，驚き，拒絶などを示す表情や発言）を避けろと言われる。しかし対話としてのインタビューでは，その必要はない。日常の会話の中で，話者が辛かったり悲しかったりした時の事を語れば，聞き手は同情し，成功したり嬉しかった時の事を語れば共に幸せな気分になるだろう。そうでなければ，話し手は聞き手が心の通う相手とは思わなくなり，話したくなくなるに違いない。

解釈学的現象学のインタビューでは聞き手と話者は別の地平に立ち，異なる文化的伝統に基づく異なるパースペクティヴから世界を見ている事が前提とされている。こうした異なる地平に立つもの同士の対話は一種のエスノグラフィック・インタビューと考えることも出来るので，J.P.Spradley の指摘は大いに参考になる。

J.P.Spradley（1979）は，エスノグラフィック・インタビューが一種の**発話事象（speech enent）**であるという。エスノグラフィーでは，フォーク・タームで語られる発話のことを指して発話事象という。そして，こうした発話事象としての「友人同士の会話」と比較して「エスノグラフィック・インタビュー」の特徴を明らかにしている。まず，友人同士の会話には次のような特徴があるという。

① 挨拶を交わして始まる。

② 会話を続けるための明示的な目的がない。
③ 話し手と聞き手が了解している事象について繰り返しの言及は避けて，冗長にならないようにする。
④ 質問をする。
⑤ もっと話してもらいたいときには相手の話に興味を示す。
⑥ 相手の話したことを知らない場合には，知らないと言って，もっと話してもらう。
⑦ 話し手と聞き手は順に交替していく。
⑧ 相手が知っていそうな細かいところは省いて話す。
⑨ もう話す必要がなくなった時点で，話を中断する。

エスノグラフィック・インタビューは友人同士の会話と多くの点で共通しているが，上述した②③⑧は当てはまらない。熟達した民族誌家は参与観察と友人同士の会話によってかなりのデータを収集出来るが，ある時点からはエスノグラフィック・インタビューの方法によりデータを体系的に集めていく。エスノグラフィック・インタビューでは，新しい要素が付け加えられていくという。

第一に，会話の目的がはっきりと告げられると言う。すなわち，何についての話を聞きたいのかをはっきりと明示するのである。これは，後に示す解釈学的対話における**「地平のある問い」**，言いかえれば**テーマの提示**のことである。

第二に，**民族誌的説明**が与えられる。これには以下の説明が含まれる。
① どのような企図でインタビューをしているのかを説明する。
② 聞き取りの記録を取ることを説明する。
③ 土地の言葉（母国語，方言，職業語，その他のインビボ・コード）で，人々が普段話している通りに話し手もらうように告げる。
④ インタビューのやり方や内容について説明する。

第三に，エスノグラフィック・インタビューに特徴的な質問がなされるという。これには次のような三つの質問がある。

a）叙述的質問 (descriptive questions)
「何をしているんですか？」「それはなんですか？」など。
回答者の普段使っている言葉による言及や叙述を求める質問。

b）構造的質問 (structural questions)
「それにはどんな種類がありますか？」「その役に昇進するまでに，どんな役職(仕事)に就いてきましたか？」など
回答者が生きた生活世界の中の諸事象，もの，出来事などをどのように区別しているのか，その世界の分節化の仕方（認識構造），その文化の知識構造などを聞き出すための質問。

c）対比的質問 (contrast questions)
「ＡとＢではどう違いますか？」など。
回答者が世界の中のものや出来事を区別するのに用いる意味の次元を発見するための質問。

友人同士の会話では，双方が熟知していることが多いので，こうした質問はほとんどなされない。しかし，エスノグラフィック・インタビューでは，聞き手と話者とは文化的伝統を共有していないことが多いので，こうした叙述的質問，構造的質問，そして対比的質問が頻繁に発せられることになる。

(2) 対話インタビューのデータ分析のための枠組み

質的データを分析するためには何らかの解釈枠組みが必要であるが，内容分析やプロトコル分析のような理論志向の質的分析と，解釈学的テーマ分析のような記述志向の質的分析では，用いる解釈枠組みが大きく異なっている。

理論志向の解釈枠組みの特徴として，Pollio ら（2006）は，①カテゴリー的，②法則定立的，③構造的・確証的な点を挙げ，それに対して記述志向の解釈枠組みの特徴として①解釈学的，②個性記述的，③共感的・理解的な点を挙げている。

① カテゴリー的／解釈学的の次元は，コーディングにおけるクローズド・コーディング／オープン・コー

ディングの次元（伊賀，2008b）に対応しているといえる。Pollioら（2006）が言うカテゴリー的枠組みでは客観的かつ信頼性の高い解釈を行うためには，予め作られた相互排他的なカテゴリーを用い，質的データを遍く篩い分ける必要があるとされる。おなじ言葉，おなじ行動単位などが評定者の判断ごとで異なる意味づけをされたのでは，客観的かつ信頼性の高い解釈は行えないからだとされる。予め意味の諸カテゴリーが用意され，もしそれに適合しない言葉や行動がデータの中に見いだされても，それらはレジデュアルなものとして無視され，カテゴリー体系の方が生かされる。

他方，解釈学的枠組みでは，言葉や行動は，それらが現れた文脈や脈絡の中で初めて意味を持つのであるから，質的データ内の分析単位を全体の脈絡から切り取って，何らかのカテゴリーに分類することでは，その意味を明らかにすることは出来ないと考える。そして，予めカテゴリーを設けずに，カテゴリーはデータの解釈の中で新しく浮上し，再編・修正され，次第に豊かになるように作り上げられていくべきだと考えられている。そうすれば，分類不能な言葉や行動が解釈の中で残余として取り残されることはない。解釈学的枠組みでは解釈ごとで，異なる解釈がなされた時点こそが，理解の出発点とされ，なぜ異なる解釈がなされるのか，その背景を明らかにすることが最大の課題とされる。

G.Radnitzky（1970）は解釈学的現象学の立場から，次の７つの解釈のためのカノンを提示している。

① **螺旋的循環（実り豊かな循環）**：解釈学的循環（部分と全体との間の循環）により解釈は深化する。テクスト全体の最初の大まかな直観的理解を出発点として，それに照らしてテクストの様々な部分を解釈する。そして，こうして解釈された各部分は再び全体に関係づけられ，全体の意味がはっきりと捉え直される。こうした部分と全体との間の行きつ戻りつするプロセスを繰り返しながら，部分と全体の意味理解が深められていく。

② **目標としての経験の統一的全体の理解**：解釈の終点は経験の統一的全体の理解である。解釈は経験の統一的全体をうまく捉えたとき，あるいは論理的矛盾のないテクストの内的一貫性をもった意味を捉えたときに終わる。

③ **包括的意味に照らした部分の理解**：部分の意味はテクスト全体（同じ著者の他のテクストを含む場合もある）の包括的意味に照らして理解される。

④ **テクストの自律性を保った解釈**：テクストはテクストそれ自体に基づいて自律的に解釈される。テクスト自体が述べていることから離れずに解釈を進め，そのテクストの作者の来歴とか，そのテーマに関する理論に依拠した解釈は避けなければならない。

⑤ **豊富な予備知識の必要性**：テクストのテーマについては豊富な知識を予め持っておくべきである。そうすれば陳述の様々なニュアンスやそれらの間の関係をよく理解できる。

⑥ **現象学還元の不能と前提の自覚**：テクストの解釈者は自らのその中に生きている伝統の理解の仕方の外に飛び出すことは出来ない。だから，解釈者は自らの諸前提がどのようなものかを自覚し，それが解釈にどのような影響をあたえているのかに気づかなければならない。

⑦ **刷新と創造を含む解釈**：あらゆる理解は以前より深化した理解である。解釈は直接与えられたものを超え，新しいニュアンスや意味の関係を見いだし，理解を豊かにする。

この七つのカノンの中で，とりわけ括弧入れと解釈学的循環が解釈学的現象学でも重要である。解釈学的現象学の研究目標は，抽象的な説明をすることではなく，現象をそれが生かされたままに記述することであるとされる。そこで，生きられた経験の記述を生むべくテクストを解釈するために，括弧入れ（bracketing）と解釈学的循環（hermeneutic circle）の二つの手続きがとられる。しかし，解釈学的現象学の場合，括弧入れの目的は科学的現象学のそれとは異なり，前提の保留ではなく，前提の自覚化である。

(3) 現象学的解釈の二つの手続き（括弧入れと解釈学的循環）

(イ) 括弧入れ

フッサールにとって「括弧入れ」とは，解釈の視界を歪める可能性のある概念上の偏り，つまり理論的信念，前概念，前提などの判断を保留しておくことであった。これは現象学的還元の基本的手続きであり，そのような前概念を取り除いて，意識がある瞬間に諸対象をどのように構成しているのか，その意識の構造状態を記述することが現象学の課題とされた。

それに対して，ハイデガーやガダマーによれば，人間の理解には，世界についての文脈づけられた前理解が避けられず，また必要であるとされた。この立場では，現象学的視点をねじ曲げて取り込まれるような解釈を識別し，それを正すのが括弧入れの作業だとされる。つまり，現象学的前提に立って解釈の循環に入るために，それと矛盾する前提を括弧に入れ，現象学的前提のみを残して，解釈に取り組まなければならないと考えている。では，現象学的前提とは何か？それは語り手の一人称による世界の理解（「手許にある存在の理解」と語り手のバナキュラな言語による「手前に現前する存在の理解」）を可能にする態度に他ならない。そのための具体的手続きとした，Pollio ら（2006）が挙げるのは①括弧入れインタビュー，②バナキュラ・コードによる解釈表現，③複数の解釈者によるテキスト解釈，の三つである。

括弧入れインタビュー (bracketing　interview) とは，現在の研究テーマに関心を抱いた理由を明白にする，すなわちその論題に興味を持った経緯を自らの来歴を交えて語ったり，現在その現象にどのような関心があるのかを述べたり出来るように，自らを対象者としてインタビューしてみる。これが，括弧入れインタビューである。この括弧入れインタビューによって，その論題でインタビューを受けたらどんな気持ちになるかを理解し，また自分はその時点でその現象をどのように理解しているのかをテーマ的に叙述することが出来るようになる。こうして，研究しようとしている現象に対して，その時点で自分が抱いている諸前提，前理解（出発点としての理解）を明確にすると共に，インタビューを受ける参加者たちがそのテーマでインタビューを受けると，どのように感じ，考えるかを予め知ることが出来るので，どのような点（論題や項目）について，どのように聞いたらよいかが分かってくるというのだ。

バナキュラー・コードによる解釈表現とは，対話的インタビューで語られたことを解釈する時に，研究者の用いる意味を押しつけないように，テクニカルタームではなく，参加者が用いた用語で解釈を表現すると言うことである。言い換えれば，コード化はバナキュラ・コードで行い，テーマ分析の手法でテーマを浮上させて記述を完了させる。テクニカル・タームは理論的解釈の段階で初めて用いる，ということだ。Pollio ら（2006）では，メルロー・ポンティのいう身体語，すなわち経験の身体性と関係した記述語を用いて解釈することを勧めている。

複数の解釈者によるテキスト解釈は，一人で解釈した場合に見落とす可能性のあることを避けるために行われる。すなわち，他に解釈の仕様はないのか，解釈の不十分な点はないか，前提となっている誤った仮定や理解はその解釈から除去されているか，などを複数の解釈者でチェックする。もしあるメンバーが自分の解釈の根拠となるテクスト部分を指し示すことが出来なかったり，他のメンバーがテクストのその部分からそうした解釈を導き出すことは難しいと指摘すれば，それは反証の論理と同じように，その解釈の十分性や妥当性を排除する要件となる。

(ロ)　解釈学的循環

Pollio ら（2006）は，解釈学的循環が，多くの知識と同様に明示的な形式知ではなく暗黙知の領域に属しているので，明確に述べることは困難だと言っている。しかし，それをあえて形式化し，①集団的解釈，②個性記述的解釈，③法則定立的解釈の三つに分けて実践的に示している。

集団的解釈：まず聞き取りを実行した研究者が最初のトランスクリプトを読み，そのテクストから諸々の意味を析出し，それらの意味の間の関係性を解釈する。その解釈を研究者集団に示し，皆で声を出してテクストを読みながら，時々休止しては，暫定的な意味や意味連関として提示されたものの当否を論じ合い，集団的な解釈を定める。ここでは，最初のトランスクリプトの聞き取りを実行した研究者によるテクスト解釈（部分）と研究者集団の解釈（全体）との間に解釈の循環が見られる。

個性記述的解釈：聞き取りを実行した研究者は，集団によって是認された解釈に基づいて，残りのトランスクリプトを読み進め，ここの描写領域（もの，人，出来事），すなわち事例ごとの突出した意味，関係，パターンを文脈に依存しながら記述的に解釈していく。そして，その解釈についても研究者集団に示して，討議しながら解釈を確定していく。ここでは，最初のトランスクリプトとその他のトランスクリプトとの間で解釈の循環が見られる。

法則定立的解釈：そして最後に，ある特定の文脈の中での個々の事例の経験の意味を比較して，他の文脈での事例の経験の意味にも通じる，より包括的な意味カテゴリーを見定めていく。この法則的定立的解釈と

いうのは一般化を目指しているのではなく，フッサールの「想像的変更」という内省的プロセスに匹敵する「多様な諸状況に不変に出現する類似性やパターンの識別プロセス」であり，多様な状況の中に示された類似の経験（経験パターン）がテーマとなる。このように，解釈学的循環の第三段階はテーマ析出のプロセスに他ならない。この共通のテーマ（共通の経験パターン）が全体であり，新しいトランスクリプトの中に，それと異なるパターンが出現すれば，その部分によって先の全体の解釈は修正される。そうした解釈の修正が必要ない場合には，その全体に照らして，新しいトランスクリプトの中の類似の経験パターンが理解される。このように個々のケース（部分）から多様なケース（全体）を，また逆に多様なケース（全体）から個々のケース（部分）を解釈するという解釈の循環が見られる。

Pollio ら（2006）は，経験のパターンやテーマ間の関係を記述した特定のテーマ構造こそ，実存的現象学的解釈の最終作品であると論じている。そして，テーマというのは，テクストに内在する客観的実体でもなければ，ある解釈者の個人的世界の投影物でもないという。それは知覚的実体であり，最初にそのテーマにたどり着いた時に考察していたデータによって与えられた一つのパターンであるという。テーマは，参加者の視点からインタビューを理解しようと試みる解釈学的実践を続ける中で自ずと浮上してくるというのだ。

インタビューの最中も，トランスクリプトの分析の最中も，テーマを捉える作業は，形式的，抽象的な一般化を目指しているのではなく，その特定の状況の中で，その人にとって，その経験はどんな意味があったのかという，参加者から見た経験の意味を捉える作業であるのだ。そして，その意味は理論的用語で表現されるのではなく，そのプロトコルの言葉で表現される。

このように，解釈者は一人称の叙述を可能にするような現象学的的立場を前提として，解釈の循環に入り，自らの前理解の枠組みが，人々の生きられた経験の叙述とどのように対応しているのかを一つづつ確かめて，必要に応じてその枠組みを変えながら，参加者の生きられた経験を捉え直していく。こうして，参加者の諸経験を彼らと共通の枠組みで捉えきることができ，新たな更新がとりあえず必要無くなったときに，地平の融合は一旦は終了したと考えることが出来る。

解釈の循環のプロセスを通して，一貫して保持されなければならないのは，人々の世界の分節化，いいかえると人々の用いるバナキュラ・カテゴリーや用語体系（nomenclature）である。

「おのれの示す当のものを，そのものが，おのれをおのれ自身のほうから示すとおりに，おのれ自身のほうから見えるようにさせる」こと，いいかえると外側から研究者が自らのカテゴリーを押しつけて，プロクルステスの寝台のように，人々の経験の意味を自らのカテゴリーの中へ鋳融かすのではなく，人々の生きられた経験を人々の叙述のままに示すことこそが，解釈学的現象学の立場に立って，現象学を実行する事に他ならない。

(4) 解釈の諸段階とインタビュー・トランスクリプトの特徴

S.Kvale（1983）は，質的調査インタビューの中で進行する解釈過程が次の6つの段階からなるという。

① 話者が自らの生活世界での経験を叙述する段階。ここでは話者も聞き手も解釈を加えていない語りが進行する。

② 話者が自らの経験の中に，新しい意味や関係を見いだす段階。話者の語る行為の中で話者による経験の内省と解釈が行われる。

③ 聞き手がインタビューの間に，話者の述べたことの意味を解釈し，その解釈を話者に聞いてもらって，確認したり正してもらう段階。対話の中での聞き手と話者が協議によって解釈を制定し，インタビューの自己矯正がおこなわれる。

④ インタビューを終えて，その書写されたテクストを，聞き手（あるいは解釈者）が解釈する段階。この解釈は次の三段階を経ると言われる。

a）自己理解：聞き手は話者の叙述したことの意味を要約し，明確な形で表現する。ここでは聞き手自身による理解がおこなわれる。

b）常識的理解：話者の言ったことの意味を拡げ，行間を読み取り，語られたときの文脈よりも広い文脈の中で解釈する。

c）理論的理解：理論に基づき，自身による理解や常識的理解を超えた解釈が行われる。

⑤　聞き手は自らのテクスト解釈（④）を正し，またインタビューの中でさらに深めたいテーマについて語ってもらうために，再度インタビューを行い，インタビューの自己矯正プロセスを継続する。

⑥　話者がインタビューの間に得た新たな洞察や知見から，自らの行為を変化させたり展開させる段階。治療的インタビューやアクション・リサーチでは重要な段階であるが，通常のテーマに焦点を当てたインタビューでは，この段階まで追跡されることはない。

対話的インタビューのトランスクリプトを解釈する場合に，解釈学の伝統におけるテクスト解釈の技法がそのまま用いられるが，解釈学の対象とする文献テクストとインタビューのトランスクリプトでは，異なる点がある。

第一に，文芸テクストはすでに仕上げられ，与えられたテクストであるが，インタビューはテクストの産出と解釈の両方に関わっている。聞き手はテクストの共作者であり，テクストの解釈は話者と話し合って決められる。

第二に，文芸テクストは作者が解釈者とその産出の特殊な文脈や状況を共有していないが，インタビューのトランスクリプトはそれを共有している。そこでインタビューでは，言葉以外の身振りや，共通の状況への暗黙の言及などによってコミュニケーションが行われている。必要ならばエスノメソドロジーの会話分析のようにトランスクリプトにそれらを含んで表現することも出来る。そうでないにせよ，そうしたノンバーバル・コミュニケーションや直示的定義はインタビュー・トランスクリプトの意味理解に活用されねばならない。

第三に，文芸テクストは意味が明確に表現され濃縮されているが，インタビュー・トランスクリプトは，曖昧さ，繰り返し，雑音などを多く含んでいるので，話者の意図した意味を理解するためには，テクストを濃縮するプロセスが必要になる。モンタージュ法の第一次編集はこの濃縮プロセスといえる（伊賀，1986）。

第四節　エピステミック・インタビュー

(1)　《あなた》経験と対話術

(イ)　《あなた》経験の三様式

H.G.Gadamer　(1975) は，《あなた》経験には，人間知，自己中心的理解，開かれた態度の三つの様式があると言い，それらが社会科学，ロマン主義解釈学，そして解釈学的現象学の理解の様式に対応するとしている。

人間知とは，《あなた》をものやプロセスと同じように手段として見なし，相手の行動を前もって推測し，自らの目的の実現に役立つように利用する事だとされる。こうして，捉えられた《あなた》は，典型的で合法則的な行為だけからなるものになる。

それよりもましな，第二の《あなた》経験は，相手を全人格的に捉えるものの，《あなた》理解は解釈者の自己中心的理解に留まっているとされる。

「対話者の一方は他方の言っていることをそれ自身から知っていると主張し，それどころか，相手が自身を理解している以上に相手を理解していると主張する。・・・（そのことにより）相手から相手固有の主張がもつ正当性を相手から奪ってしまう。・・・解釈学の領域でそのような《あなた》経験に対応するのは歴史意識と呼ばれている。・・・歴史意識は・・・自己の歴史的制約性を否定することにより，・・・先入見の光のもとに示されるものを見そこなってしまう。これは《わたし-あなた》の関係におけるのと同じである。その関係の相互性から抜け出そうとする者は，この関係を変質させ，その道徳的な拘束性を破壊してしまう。」（H.G.Gadamer, 1975　訳書555～557頁）

そして，第三の解釈学的《あなた》経験の最高段階では，解釈者自身が自らの歴史性を認識する場合に生じる。この場合には作用史的意識が伝承に対してもつ「開かれた態度」が《あなた》に対してとられる。

「《あなた》を《あなた》として本当に経験すること，すなわち《あなた》の要求を聞き流さずに，自らに対して《あなた》になにかを言わせることが重要である。ここに《あなた》経験の開放性がある。しかし，この開放性は最

終的には，単に，なにかを言わせようとしているひとりの相手に対する開放性ではない。むしろ，およそなにかを言わせようとしている者は，原則的な仕方で開かれているのである。お互いに相手に開かれることなしには，人間同士の真の結びつきは存在しない。お互いに相手と結びついているということは，お互いに相手の言うことに耳を傾けることができるということである。ふたりがお互いに理解し合うとき，それは一方が他方を〈理解する〉，つまり，見渡す，ということではない。同様にして，〈あるひとの言うことに耳を傾ける〉というのは，けっして，相手が望むことを盲目的に行うということではない。・・・他者に開かれていることは，（たとえ《わたし》に対して自分の意見を主張御する特定の相手がいない場合でも），《わたし》に対して，《わたし》の考えのなかになにかを妥当させる，ということを含意している。」（H.G.Gadamer, 1975　訳書558頁）

(ロ) 対話における産婆術的な知の生産

こうした開かれた態度での対話によってドクサから解放され，ロゴスが産みだされるという。対話のなかの「問い」に抵抗して，対話相手から最初に語られるのはドクサである。このドクサから離脱してエピステーメに至る途は，ひらめき（Einfalle）とそこから生じる未決性の領域への方向を示す「問い」によって開かれる。ここでは，問う技法は思考する技法でといわれる。

「問う技法は，知ろうとしている者，すでに問をもっている者のためのものである。問う技法は支配的な意見の圧力を払いのける技術ではない。それはすでに支配的な見解からの自由を前提としている。・・・対話術はだれに対しても議論して勝つ技術ではない。・・・問う技術としての対話術の真価は，ただ，問い方を知る者が，問い（つまり未決定の状態への方向）をしっかりつかまえているということによってのみ示される。問う技法は，問い続ける技法，つまり，それは思考する技法なのである。」（H.G.Gadamer, 1975　訳書567頁）

こうした考え方に則れば，インタビューアーは話者の認識の共同体の思考習慣に慣れ親しんではおらず，彼らのドクサの外部にあるが故に，容易に「問い」を立てられるという有利な立場にあるといえる。そうした慣れ親しんでいない視点から発せられた［問い］に応じて話者が自らの生活世界を眺めてみると新しい意味が見いだせる可能性がある。彼らの経験の新たな面が暴露されると言うのだ。ドクサを前提としながらそれから解放され得るのは開かれた態度での対話を通してであるという。

「対話の産婆術的生産は，・・・彼らが述べる意見（ドクサ）に依拠している。いみとして言われた事柄の内在的な帰結が対話の中で展開されるのである。対話のなかで真実として現れるのは《わたし》の意見でも《あなた》の意見でもない。・・・対話者たちの主観的意図をはるかに超えるロゴスである。」（H.G.Gadamer, 1975　訳書569頁）

さて，「問い」によって解明すべき事柄はある意味（方向）をもって開かれる。つまり，「問い」は一方で未決性を他方で限界づけを与える。つまり意味を生み出し，知を生産する問いとは方向づけられた問い，すなわちテーマのある対話の中でしか行われないと言うことだ。

「問いは本質的に意味をもつ。ただし意味とは方向感覚である。答えは，それが有意味で理にかなったものであるためには，ある方向に従って出されなければならないが，問いの意味とはその方向のことである。問いによって，問われたものは，ある特定の観点へと移される。・・・問いのこの未決性は際限がないものではない。むしろ，それは問いの地平によってある仕方で限界づけられている。地平をもたない問いは，なにもえないで終わる。問いが指示する方向の流動性・無規定性が，〈ああかこうか〉の特定性へと立ておかれるときはじめて，問いは地平のある問いとなる。」（H.G.Gadamer, 1975　訳書561～2頁）

(2) エピステミック・インタビュー

(イ) ドクサスティック・インタビュー

S.Brinkemann （2007）は，対話的インタビューをドクサスティック・インタビューとエピステミック・インタビューに分ける。doxa（δοξα）とは，①主観的な考え・意見・信念，②表象・幻影，③評価・評

判などの意味があるが，ここでは意見のことである。また，episteme（ε π ι σ τ η μ η）とは，①熟達，②知・知識などの意味があるが，ここでは知のことである。

ドクサスティック・インタビューとは，参加者に具体的経験の叙述を求めるインタビューのことである。インタビューアーは回答者から生活世界の経験を映す叙述や語りを引き出す役割を与えられている。そしてこのインタビューの目的は｜参加者たちが経験し，生きた中心的テーマを叙述し，理解すること｜だとされる。

インタビューの参加者は常にドクサのみを与え，そこから理論的知識をもち，方法的訓練を受けた研究者が，エピステーメを得るとされる。エピステーメに到達する手続きはインタビューの中には設けられておらず，分析の過程で，現象学的還元や形相学的還元を研究者が実行して，エピステーメに到達すると考えられているというのだ。

(ロ) エピステミック・インタビュー

S.Brinkemann（2007）は，対話的インタビューがナラティヴ・インタビューと異なる点を，ソクラテスの対話術に倣って，次の諸点に求める。

① 聞き手が回答者よりも多くしゃべることがある。

② 回答者の特定の経験内容を叙述してもらうような質問をしない。

③ 回答者の見解に異議や反論を加えることがある。

④ 回答者が対話を心地よい体験であることを確かめない。

⑤ インタビューが人目を忍んで私的空間で行われるとは限らず，しかも論題は私的経験や詳細な伝記的体験ではなく，人間が共通に抱えているテーマについて対話が行われる。

⑥ 調査者は目撃者ではなく参加者であり，対話相手の言ったことを真剣に考え，違うと思ったら反論する。調査者は回答者がなぜそう言ったのかなどについて関心を持たない。そのように言わせた自伝的背景とか心理的機制などにも関心がない。

日常の会話では，対話者たちは目撃者として相手の行動を因果空間に位置づけ，自らの行動を説明しうる相手の主体的能力を無視するならば，対話相手は自分の価値を傷つけられたと思うであろう。同様に，対話的インタビューでは，調査者は一人の参加者として対話に加わり，決して外から目撃者として，人々の言うことを聞いたり，彼らの行動を見て，それを因果空間の中に位置づけて客観化することはしない。むしろ，対等の立場で，対話に参加し，相手の言ったことを真剣に考え，同意できなければ反論し，合意できるまで議論を尽くす。その場合，対話相手は弁明能力をもち，自説を正当化することのできる人として見なされ，対話がなされる。

S.Brinkemann（2007）は，こうしたエピステミック・インタビューを価値合理的な問いを立てる実践知的社会科学や公共哲学のの方法として提唱している。そうした領域では，一回限りで｜固定した知識｜に到達することはなく，会話の上でのリアリティの質を高め，自らの社会について知り，自らの生活の重要な目標や価値について論じられる。そこでは，対話者たちは双方とも，自らが生きている規範的秩序に言及して，相互に自らの説明責任を果たしあう同市民として位置づけられている。語られることは，個々人の人生や経験ではなく，正統な根拠である。対話はそうした弁明という知的実践に他ならないというのだ。

(3) 共同探求としての解釈的な相互意見表明

C.S.Dinkins（2005）は，ソクラテス的・解釈学的インタビューの方法を提示する。これも，話者の｜語り」ではなく，対話者双方が相互に意見を述べ，共に熟考し，共通の洞察を進めていく「対話」を目指している。Dinkinsによれば，ナラティヴ・インタビューは話者の｜語り」を聞き手が｜誘導する」ことを避けるために，最小限の質問をして，ノンバーバルなコミュニケーション手段も極力抑制するが，その最小限の質問がかえって話者の視点を限定し，ナラティヴの方向を誘導しやすく，また研究者の前提や偏見が隠されたままで話者はそれに抵抗できないという。対話では，双方が自らの前提や意見を表明し合い，また相手の意見を開かれた態度で傾聴するので，聞き手の質問の仕方や内容それ自体に，話者が反論を加え，その現象に対する話者自身の視点を採用して答える途が開かれている。そして，聞き手の質問の仕方や内容が，話者

の視点からどのようにずれているのかが表明されるというのだ。

ソクラテス的・解釈学的インタビューでも，エピステミック・インタビューと同様に，エレンコスの方法が採用される。エレンコスはソクラテスが対話をするときの方法である。これは次の八つの段階からなっている。

① ソクラテスは，問い質したくなるような言動をする者に遭遇する。

② ソクラテスは，その人に，その言動に関連する中心的概念（たとえば徳，正義，友情など）を定義してもらう。今や共同探求者となったその人は，定義Dを与える。

③ ソクラテスはその人が慣れ親しんだアナロジーや実例を挙げる。そして，彼と共同探求者は，ともにそのアナロジーや実例のもとで定義Dの必然的帰結を推論する。

④ ソクラテスは，推論された結論Cと共同探求者が抱いているとソクラテスが思う信念Bとの間の矛盾を指摘する。ソクラテスは共同探求者に定義DとDに矛盾する信念Bのいずれを拒否するか選択させる。

⑤ 共同探求者は，通常はBを拒否したくないので，定義Dを拒否する。共同探求者はDを述べた時にはそれを信じていたが，Bの方が重要であるとしてBを保持する。この選択によってDは棄却され，Bが残される。

⑥ ソクラテスは，新しい定義D_1を共同探求者に求める。

⑦ ソクラテスと共同探求者は，ステップ③からステップ⑥を数回繰り返す。

⑧ ソクラテスと共同探求者が問題の中心的概念の最終的で議論の余地のない定義を発見したところで対話は終了する。

こうした対話のプロセスで，エピステーメが得られると言うのだ。さて，このソクラテス的・解釈学的インタビューでは，問題とされる現象に関連する中心的概念の定義づけを問い質すことから始める理由として，Dinkinsは次の四つを挙げている。

① ソクラテスが言うように，その現象について知ること無しには，何がその現象を代表しているか分からないのである。

② 共同探求者（対話相手）にとって，その現象が何を意味するのかと言う以外の前提を対話から排除できるからである。

③ さらなる探求を進めるための糸口が多数与えられるからである。

④ 共同探求者のそのテーマについてのインタビューに対する態度や，回答の背後にある価値観は，その事実についての共同探求者の信念，すなわち「定義づけ」によって示されるからである。

テーマに関連する中心的定義を求めることから始めることによって，話者の視点から見た世界が明るみに出され，そのドクサから対話によって話者自身がエピステーメに到達するように，聞き手は産婆の役割を果たすのが，この方法の真意である。

さて，この方法でまず問題となるのは，エレンコスによって到達されるエピステーメの性格である。もし，定義D，D_1，D_2，・・・，D_nのうち最初の方のD，D_1などがドクサでD_nが人類に普遍的な知であるならば，それはエピステーメと呼ぶにふさわしいかも知れない。しかし，D_nはBと矛盾しない定義であるから，エレンコスによって到達されたD_nは信念Bの体系に含まれる知である。つまり，D_nはポリス共同体に固有の共有知ということになる。つまり，D，D_1などが個人的憶見で，D_nは認識共同体の正当な知ということになる。

次に，エレンコスは解釈学的循環といえるのかという問題がある。ステップ③～⑥を繰り返すというのは，個人的憶見が共同体の知に純化されていくということであって，異なる認識共同体間の地平の融合が生じているのではない。同市民間の視点の収斂とでもいうべきプロセスが生じているのだ。これは解釈学的循環というよりは正当的周辺参加（学習）のプロセスが生じているのであって，隔たりを前提とした理解のあり方である解釈学的循環が生じたというわけではない。

第五節　対話としてのインタビューが解釈学的現象学に適している理由

H.R.Pollio，et al（2006）は実存的現象学の立場から，質的研究においては「自由な対話としてのインタ

ビュー」を用いるべきだと主張する。

サーベイや実験室実験では，研究者の視点や準拠枠のみが特権づけられ，参加者（研究対象者）は自らの経験を自らの視点や準拠枠に従って表明することが許されない。それに対して，現象学的インタビューは「問・答式の問答として行われるのではなく，自由な対話として行われるべきだという。質問は対話の流れの中で生じ，文脈にそった適切な形でなされる。そうした，対話の流れや一貫性に反する質問や解釈は，参加者（話者）によって反論されたり，正されたりするだろう。しかし，研究者が参加者の視点や準拠枠に沿わない質問を立て続けにすれば，意味のある対話が交わされることはない。現象学的インタビューは，話者の経験の豊かな叙述と相互に情報を与え合う対話を促進するように進めなければならないとされる。

対話法が，人々の日常生活世界における諸経験を叙述する方法として最も適している理由は，次の点である。

①　人間の経験はそもそも視野的構造をもっている。つまり，人々は自らの視点から，いいかえると特定の関心の文脈から，外界を切り取って見ている。そうして切り取られた外界が，現存在にとって手許にある世界内存在の姿になる。

②　人々は別々の言葉で，同じ経験を語ることもあれば，同じ言葉で別々の経験を語っていることもある。いいかえると世界を分節化するための装置である言語は，認識の共同体，あるいは実践の共同体ごとで異なっていたり，それらの間で共通であったりする。同一の母語共同体に属していても，その内部では様々なローカルな言語共同体が重層的に存在していて，人々は自ら属しているローカルな諸言語共同体の中から，その場その場の関心に叶った，またその場の文脈に適切な言語を用いて，自らの経験を表現する。つまり，ある人は同時に別々の意味世界に生きることが出来る。そして状況に即して，相手と共通の意味世界に入って理解し合う。

この二つの事実に叶った経験の叙述の方法は，対話しかないであろう。自然科学の採用する第三者（客観的観察者）の視点による実験や観察は①を認めないし，伝統的な心理学や発見的方法の採用する第一者の視点による内観法は②に気づかない。

人々にとって，自らの経験の意味は叙述するにつれて変化するし，すべてが最初から透明であるわけでもなく，また対話の中で初めて想起され意味づけられることもある。話者は，自らの経験のエキスパートであったり，すべてを「明るみ」に出しているとは限らない。対話の中で，聞き手たる研究者の求めに応じて，自らの経験を「明るみ」の中に出してくる。聞き手たる研究者は話者の原体験には接近し得ないが，その経験に近い言葉で表現される経験を，もしその話者のローカルな言語共同体の使用する言語（すなわち認識構造）に精通すれば，理解できるようになるだろう。こうした話者のローカルな言語共同体の使用言語と世界観への精通もまた，研究者がその共同体の多くの話者との対話の中で達成されるものである。このように，対話以外の方法では，話者の視点やローカルな言語共同体に固有の言語使用や世界の分節化を十分に捉えることは出来ない。

ただし，産婆術の方法（エレンコス）によって，インタビューの中で話者自身に自らの認識共同体の共有知に到達させるように対話を進めていくのは，公共哲学のような万人が受け入れられる価値の確立を目指す分野では有効かも知れないが，異文化間の地平の融合としての理解を進める場合には，Kvale や Pollio らの「対話としてのインタビュー」の方法が適しているといえる。だが，この方法では，分析結果とその報告を話者たちに見せて問題点を指摘してもらう以外に話者たちを分析に参加させる手立てはないことを認めなければならない。その意味で，この方法はデータ収集においては聞き手と話者の共同制作が行われるものの，データ分析と理論構築の段階では研究者の単独制作が行われることになる。

参考文献

Addison, R.B., 1989, "Grounded Interpretive Research: An Investigation of Physician Socialization" in M.J.Packer &, R.B.Addison, (eds.) *Entering the Circle*, State University of New York, Albany, N.Y., 39-57.

————., 1999, "Grounded Hermeneutic Editing Approach", in B.F.Crabtree &, W.L.Miller

(eds.), *Doing Qualitative Reseach*, Sage, Thousand Oaks.California, 145-161.

Attride-Stirling, J., 2001, "Thematic networks: an analytic tool for qualitative research", Qualitative Research, 1(3):385-405.

Bates, J.A., 2004 "Use of narrative interviewing in everyday information behavior research", Library and Information behavior research, 26:15-28.

Benner, P., (eds.)1994, *Interpritive Phenomenology — Embodiment, Caring, and Ethics in Health and Illness*, Sage, London.

Birus, H., 1986, Hermeneutische Positionen, Gottingen:Vandenhoeck & Ruprecht. 竹田・三国・横山訳, 1987,「解釈学とは何か」山本書店.

Blumer, H., 1969, *Symbolic Interactionism : Perspective and Method*, Englewood Clifts, New Jersey, Prentice Hall,Inc. 後藤将之訳「シンボリック相互作用論：パースペクティヴと方法」, ・草書房 1991.

Bogdan, R., & S.J.Taylor, 1975, *Introduction to qualitative research methods*. New York: Jhon Wiley.

Bollnow, O.F., 1949, *Das Aufsätze zur Theorie der Geisteswissenschaften*, Mainz:Kirchheim Verlag. 小笠原道雄・田代尚弘訳, 1978,「理解するということ」以文社.

Borkan, J., 1999, "Immersion/Crystallization, in B.F.Crabtree &, W.L.Miller (eds.), *Doing Qualitative Reseach*, Sage, Thousand Oaks. California, 179-194.

Boyatizis, R.E., 1973, *Alcohol and aggression: A study of the interaction*. Unpublished final report on Contract No. HMS-42-72-178, submitted to the National Institute of Alcohol Abuse and Alcoholism. Rockvill, MD.

————, 1974, " The effect of alcohol consumption on the aggressive behavior of men", Quarterly Journal of Studies on Alcohol, 35:959-972.

————,1975, "The predisposition toward alcohol-related interpersonal aggression in men", Journal of Studies on Alcohol, 36:1196-1207.

————, 1983, "Who should drink what, when, and where if looking for a fight", in E.Gottheil, K.A.Druley, T.E.Skoloda, & H.M.Waxman (eds.) Alcohol, drug abuse and aggression. Springfield, IL:Charles C Thomas. 314-329.

————,1998, *Transforming Qualitative Information*, Sage Thousand Oaks, California. Braun,V., & V.Clarke, 2006, "Using thematic analysis in psychology", Qualitative Research in Psychology, 3:77-101.

Brinkmann, S., 2007, "Could Interviews Be Epistemic?: An Alternative to Qualitative Opinion Poling", Qualitative Inquiry, 13(8):1116-1138.

Bulmer, M.I.A., 1975, "Sociological Models of the Mining Community," Sociological Review, 23:61-92.

Clarke, A.E., 2003, "Situational Analyses: Grounded Theory Mapping After the Postmodern Turn, Symbolic Ineraction, 26(4):553-576.

Charmaz, K., 1995, "Between Positivism and Postmodernism: Implications for Methods," Studies in Symbolic Interaction, 17:43-72.

Charmaz, K., 2000, in N.K.Denzin, & Y.S.Lincoln, *Handbook of Qualitative Research*, second edition, Thousand Oaks, Sage Publications. 藤原顕訳「質的ハンドブック２巻：質的研究の設計と戦略」北大路書房.

Charmaz, K., 2006, *Constructing Grounded Theory: A Practical Guide Through Qualitative Analysis*, Thousand Oaks, CA:SAGE Publications.

Cohen, G., 1996, *Memory in the real world*. New York:Psychology.

Crabtree, B.F., & W.L.Miller, 1999, "Using Codes and Code Manuals: A template organizing style of interpretation", in B.F.Crabtree &, W.L.Miller (eds.), *Doing Qualitative Reseach*, Sage, Thousand Oaks.California, 163-177.

Crotty, M., 1996, *Phenomenology and Nursing Research*. Churchill Livingstone, Melbourne.

————, 2003, *The Foundations of Social Reseach*, Sage, London.

Denzin, N.K., 2001, "The reflexive interview and a performative social science", Qualitative Research, 1(1):23-46.

Dey, I., 1999, *Grounding Grounded Theory*. San Diego: Academic Press.

Dilthey, W., 1914, *Gesammelte Schriften*, Bd. I, Stuttgart, 山本英一・上田武訳1981,「精神科学序説：社会と歴史の研究にたいする一つの基礎づけの試み」以文社.

————,1946, *Die Philosophie des Lebens*. Eine Auswahl aus seinen Schriften 1867-1910, hrsg, von Herman Nohl. Vittorio Klostermann, 久野昭監訳「生の哲学」, 1987, 以文社.

————, 1957, Gesammelte Schriften, Bd. V, Stuttgart, 317～331, 久野昭訳, 1973,「解釈学の成立」以文社.

Dinkins, C.S., 2005, "Shared Inquiry: Socratic-Hermeneutic interpre-viewing", in P.M.Ironside (eds.) *Beyond Method: philosophical conversation in healthcare research and scholarship*, Wisconsin: University of Wisconsin, pp.111-147.

Douglas, J., 1970, "Understanding everyday life" in J.Douglas (eds.) *Understanding Everyday Life* Aldine Publishing Company, Chicago.

Douglass, B.G., & C.Moustakas, 1985, "Heuristic Inquiry: The internal search to know", Journal of Humanistic Psychology, 25(3):39-55.

Dowling, M., 2007, "From Husserl to van Manen, A Review of Different Phenomenological Approaches" International Journal of Nursing Studies, 44:131-142.

Dreyfus, 1991, *Being-in-the-World: A Commentary on Heidegger's Being and Time, Division* I, Cambridge, MA., Massachusetts Institute of Technology. 門脇監訳「世界内存在―『存在と時間』における日常性の解釈学」産業図書.

Feredy, J., & E.Muir-Cochrane, 2006, "Demonstrating Riger Using Thematic Analysis: A Hybrid Approach of Inductive and Deductive Coding and Theme Development", IJQM, 5(1):1-10.

Flick, U., 1995, *Qualitative Forschung*, Hamburg, Rowohlt Taschenbuch Verlag. 小田博志他訳「質的研究入門」, 2002, 春秋社.

Gadamer, H.G., 1975, *Wahrheit und Methode Grundzüge einer pilosophischen Hermeneutik*, J.C.B. MOHR, Tübingen. 轡田収・巻田悦郎他, 1986, 2008,「真理と方法 I・II」法政大学出版会.

Geanellos, R., 1999, "Hermeneutic interviewing", Contemporary Nurse, 8:39-45.

Gendlin, E., 1962, *Experiencing and the creation of meaning*. Northwestern University Press.

Giorgi, A., 1970, *Duquwsne Studies in Phenomenological Psychology:Volume* I, Duquesne University Press. Pittsburg, PA. 早坂泰次郎監訳「心理学の転換」・草書房, 1985.

————, 1976, *Phenomenology and the Foundation of Psychology*, Duquesne University Press. Pittsburg, PA. 早坂泰次郎監訳「心理学の転換」・草書房 1985.

————, 1985, "Sketch of a Psychological Phenomenological Method", in A.Giorgi (eds.) Phenomenology and Psychological Research, Duquesne University Press. Pittsburg, PA.

————, 1992, "Description versus Interpritation : Competing Alternative Strategies for Qualitative Research", Journal of Phenomenological Psychology, 23(2):119-135.

————, 1997, "The Theory, Practice, and Evaluation of the Phenomenological Method as a Qualitative Research Procedure", Journal of Phenomenological Psychology, 28(2):236-260.

————, 1999, "A Phenomenological Perspective on Some Phenomenographic Results on Learning", Journal of Phenomenological Psychology, 30(2):68-93.

————, 2000a, "The status of Husserlian phenomenology in caring research", Scandinavian Journal of Caring Science, 14:3-10.

————, 2000b, "Concerning the application of phenomenology to caring research" Scandinavian

Journal of Caring Science, 14:11-15.
————, 2002, "The Question of Validity in Qualitative Research", Journal of Phenomenological Psychology, 33(1):1-18.
————, 2004, "A Way to Overcome the Methodological Vicissitudes Involved in Researching Subjectivity", Journal of Phenomenological Psychology, 35(1):1-25.
————, 2006, "Difficulties Encountered in the Application of the Phenomenological Method in the Social Science", Anállse Psicológica, 3(24):353-361.
Glaser, B.G, & A.L.Strauss, 1967, *The Discovery of Grounded Theory : Strategies for Qualitative Reserach*, Chicago:Aldine Publishing Company, 後藤, 大出, 水野訳「データ対話型理論の発見」, 1996, 新曜社.
Glaser, B.G., 1978, *Theoretical Sensitivity*, Mill Valley, CA:The Sociology Press.
Glaser, B.G., 1992, *Basics of grounded theory analysis:Emergence vs foecing*. Mill Valley, CA:Sociology Press.
Glaser, B.G., 1998, *Doing grounded theory: Issues and discussions*. Mill Valley, CA:Sociology Press.
Glaser, B.G., 2002, "Conceptualization: On Theory and Theorizing", International Journal of Qualitative Methods, 1(2):1-31.
Groenewald, T., 2004, "A Phenomenological Research Design Illustrated", International Journal of Qualitative Methods, 3(1):1-26.
Guba, E.G., 1978, *Toward a methodology of naturalistic inquiry in educational evaluation*. *Monograph8*. Los Angeles: UCLA Center for the Study of Evaluation.
Gusdorf, G., 1950, Mémoire et personne. Paris: Presses Universitaires de France.
Gurwitsch, A., 1964, *The Field of Consciousness*, Duquwsne University Press, Pittsburgh.
Haas, P.M., 1992, "Introduction:epistemic communities and international policy coordination", International Organizayion, 46(1):1～35.
Hayes, N., 1997, "Theory-led thematic analysys: Social identification in small companies", in N.Hayes (eds.) *Doing qualitative analysis in psychology*, Hove: Psychology Press.
————, 2000, *Doing Psychological Research*, New York: Open University Press.
Heidegger, M., 1935, *Sein unt Zeit*, Halle:Max Niemeyer. 原佑・渡辺二郎訳, 2003,「存在と時間」 中央公論社.
Holroyd, C., 2001, "Phenomenological Research Method, Design and Procedure:A phenomenological investigation of phenomenon of being-in-community as experienced by two individuals who have participated in a Community Building Workshop" Indo-Pacific Journal of Phenomenology, 1(1):1-12.
Holstein, J.A & J.F.Gubrium, 1995, The Active Interview, London and New Delhi: Sage. 山田・兼子・倉石・矢原訳「アクティヴ・インタビュー」せりか書房.2004.
Husserl, E., 1950, *Ideen — Zu einer reinen Phänomenologie und pänomenologischen Philosophie*. Erstes Buch, Martinus Nijhoff, Haag. 渡辺二郎訳 1976 「イデーンⅠ」みすず書房.
伊賀光屋, 1986,「モンタージュ鑑屋」新潟大学教育学部紀要, 28(1):79-97頁.
————, 1997,「参与観察『蔵』—蔵人の労働と生活」新潟大学教育学部紀要, 36(1):129～147頁.
————, 2000,「産地の社会学」多賀出版.
————, 2003,「出稼ぎから通勤へ—新潟県越路町の酒造出稼ぎの変化」日本労働社会学 会年報 第14号, 103～125頁.
————, 2005,「品質構築のためのフレーミングとディカップリング—『有りがたし』のフレーミングと『よしかわ杜氏の郷』のアクター・ネットワーク—」新潟大学教育人間科学部紀要, 7(2):181～196頁.
————, 2005,「外部スターによる工業的品質の構築と経路依存からの脱却—『加藤酒造』融米造り」新潟大学教育人間科学部紀要, 8(1):49～64頁.

――――――, 2006,「職業コミュニティへと取り込まれる過程―杜氏になる―」新潟大学教育人間科学部紀要, 8(2)：171－182頁.
――――――, 2006,「企業コミュニティに埋め込まれた知識―朝日酒造の酒造技術―」新潟大学教育人間科学部紀要, 9(1)：61－85頁.
――――――, 2007,「語りの中の職業コミュニティ―峯村杜氏のインビボ・コード―」新潟大学教育人間科学部紀要, 9(2)：241－276頁.
――――――, 2007,「酒屋仲間と酒造コミュニティ」新潟大学教育人間科学部紀要 10(1)：21－32頁.
――――――, 2008a,「科学的現象学の方法論について」新潟大学教育人間学部紀要 10(2)：101－116.
――――――, 2008b,「グラウンデッド・セオリーの方法論について」新潟大学教育学部研究紀要 1(1)：53－81頁.
――――――, 2009a,「解釈学的現象学の方法論」新潟大学教育学部研究紀要 1(2)：151－178頁.
――――――, 2009b,「地平を融合させる対話としてのテーマ分析法」新潟大学教育学部研究紀要 2(1)：15－38頁.
石川求, 2005,「対話とはなにか―ガーダマー拾遺―」思想 No.974：47-64.
Islam, N., 1983, "Sociology, Phenomenology and Phenomenological Sociology", Sociological Bulletin, 32(2)：134-452.
Jovchelovitch, S., & M.W.Bauer, 2000, "Narrative Interviewing", in M.W.Bauer, & G.Gaskell (eds.) Qualitative researching with text, image and sound: a practical handbook, London:Sage, pp57-74.
Kvale, S., 1983, "The Qualitative Research Interview: A Phenomenological and Hermeneutical Mode of Understanding", Journal of phenomenological psychology, 14(2):171-196.
――――――, 2006, "Dominance Through Interview and Dialogue", Qualitative Inquiry, 12(3):480-500.
Kvale, S., & S.Brinkman, 2009, *InterViews: Learning the Craft of Qualitative Research Intervewing*, second edition, Los Angeles :Sage.
King, N., 1998, "Template Analysis", in G.Symon & C.Cassell (eds.), *Qualotative Method and Analysis in Organizational Research: A practical guide*. London,Sage. 118-134.
小池稔, 1979,「現象学と解釈学（Ⅰ）」アルテス・リベラレス 第25号：1－20.
――――――, 1980,「現象学と解釈学（Ⅱ）」アルテス・リベラレス 第27号：1－17.
――――――, 1983,「現象学と解釈学（Ⅲ）」アルテス・リベラレス 第33号：1－15.
――――――, 1985,「現象学と解釈学（Ⅳ）」アルテス・リベラレス 第36号：1－14.
――――――, 1988,「現象学と解釈学（Ⅴ）」アルテス・リベラレス 第43号：1－21.
Lincon, Y.S., & E.G.Guba, 1985, *Naturalistic inquiry*. Beverly Hills, CA:Sage.
Mall, R.A., 1993, "Phenomenology — Essentialistic or Descriptive ?", Husserl Studies, 10:13-30.
McPhail, C., & C.Rexroat, 1979, "Mead vs. Blumer: The Divergent Methodologocal Perspectives of Social Behaviorism and Symbolic Interactionism", ASR, 44:449-467.
Miller, W.L., & B.F.Crabtree, 1999, "Clinical Research : A maltimethod typology and qualitative roadmap", in B.F.Crabtree &, W.L.Miller(eds.), *Doing Qualitative Reseach*, Sage, Thousand Oaks. California, 3-30.
――――――, 1999, "The Dance of Interpretation", in B.F.Crabtree &, W.L.Miller (eds.), *Doing Qualitative Reseach*, Sage, Thousand Oaks.California, 127-143.
Mills, J., A.Bonner, & K.Francis, 2006, "The Development of Constructivist Grounded Theory" International Journal of Qualitative Methods, 5(1):.
Mills, M.B. & A.N.Huberman, 1994, *Qualitative Data Analysis: An expanded sourcebook* (2nd ed.) Sage, Newbury Prak, CA.
Mishler, E.G., 1986, *Research Interviewing: Context and Narrative*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

Moustakas, C., 1961, *Loneliness*. Englewood Cliffs, NJ.:Pretice-Hall.

————, *The touch of loneliness*. Englewood Cliffs, NJ.:Pretice-Hall.

————, 1990 (a), *Heuristic Reseach: Design, methodology and applications*, Sage, Newbury Prak, CA.

————, 1990 (b), *Heuristic Reseach: Design and methodology*, Person-Centerd Review, 5(2):170-190.

————, 1994, *Phenomenological Research Methods*, Sage, Thousand Oaks. California.

Naudin, J., C.Gros-Azorin, A.Mishara, O.P.Wiggins, M.A.Schwartz, & J-M.Azorin, 1999, "The Use of the Husserlian Reduction as a Method of Investigation in Psychiatry", Journal of consciosness studies, 6(2, 3):155-171.

Neisser, U., 1982, *Memory observed: Remembering in natural contexts*. New York: Worth Publishers.

Packer, M.J., 1985, "Hermeneutic inquiry in the study of human conduct", American Psychologist, 40:1081-1093

————, 1989, "Tracing the Hermeneutic Circle: Articulating an ontical study of moral conflicts", in M.J.Packer &, R.B.Addison, (eds.) *Entering the Circle*, State University of New York, Albany, N.Y., 95-117.

————, 1989, Packer M.J., & R.B.Addison, 1989 ,"Evaluating an interpretive account", in Packer M.J., & R.B.Addison (eds.), *Entering the Circle: Hermeneutic investigation in psychology*, Albany, State University of New York Press. 13-36.

————, 1991, "Interpreting Stories, Interpreting Lives: Narrative and Action in Moral Development REsearch", in M.B.Tappan & M.J.Packer (eds.), Narrative and Storytelling: Implication for Understanding Moral Development, New Directions for Child Development, 54:63-82.

————, 2000, "An Interpretive Methodology Applied to Existential Psychotherapy", Methods Annual Edition, 493-514.

Palmer, R.E.1969, *Hermeneutics: Interpretation theory in Schleiermacher, Dilthey, Heidegger and Gadamer*. Evanston, IL: Northwestern University Press.

Patton, M.Q., 1990, *Qualitative evaluation and research methods*. Thousand Oaks, CA:Sage.

Petitmengin, C., 1999, "The Intuitive Experience", Journal of consciosness studies, 6(2, 3):43-77.

————, 2006,"Describing one's subjective experience in the second person: An interview method for the science of consciousnes", Phenomenology and the Cognitive Sciences, 5:229-269.

Polkinghorne, D.E., 1989, "Phenomenological Research Methods", in R.S.Valle, & S.Halling(eds.) *Eistentia-phenomenological perspectives in psychology: exploring the breadth of human experience: with a spcial section on transpersonal psychology*. Plenum Press. 41-60.

Pollio, H.R., T.B.Henly, C.J.Thompson, J.Barrell, & M.D.Chapman, 2006, *The Phenomonology of Everyday Life*, Cambridge:Cambridge University Press.

Pollio, H.R., T.R.Graves, & M.Arfken, 2006, "Qualitative Methods", in F.T.L.Leong, & J.T.Austin (eds.) *The Psychology Research Handbook: a guide for graduate students and research assistants*. Los Angles: Sage. pp.254-274.

Pollio, H.R. & M.J.Ursiak,2006, "A Thematic Analysis of Written Accounts: Thinking about Thought", in C..Fischer (eds.) *Qualitative research methods for psychologists: imtroduction throug empirical studies*. Elsevier: Academic Press.

Radnitzky, G., 1970, *Contemporary schools of metascience*, Gothenburg, Sweden:Akademiforlaget.

Rennie, D.L., 1998, "Grounded Theory Methodology: The Pressing Need for a Coherent Logic of Justification" Theory & Psychology, 8(1):101-119.

————, 2007, "Hermeneutics and Humanistic Psychology", The Humanistic Psychologist, 1:1-26

Rennie, D.L., & K.D.Fergus, 2006, "Embodied Categorizing in the Grounded Theory Method",

Theory & Psychology, 16(4):483-503.

Riessman, C.K., 1993, *Narrative Analysis, Newbury* Park:Sage.

————, 2008, *Narrative Methods for the Human Sciences*, Los Angeles:Sage.

Ryan, G.W., & H.R.Bernard,2003, "Techniques to Identify Themes", Field Methods, 15(1):85-109.

Ryan, G.W., & T.Weisner, 1996, "Analyzing words in brief descriptions: Fathers and mothers describe their children", Cultural Anthropology Methods Journal, 8(3):13-16.

桜井厚・小林多寿子編著「ライフヒストリー・インタビュー」せりか書房, 2005.

Seidman, I., 2006, *Interviewing as Qualitative Research: A Guide for Researchers in Education and the Social Sciences*. New York: Teachers College Press.

Scheibelhofer, E., 2008, "Combining Narration-Based Interviews with Topical Interviews: Methodological Reflections on Research Practices", International Journal of Social Research Methodology, 11(5):403-416.

Schorn, A., 2000, "The' Theme-centerd Interview': A Method to Decode Manifest and Latent Aspects of Subjective Realities",

Schleiermacher, F., 1998, *Hermeneutics and Criticism*, Cambridge:Cambridge University Press.

Schutz, A., 1962, *Collected Papers* I *The Problem od Social Reality*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht. 渡部・那須・西原訳 1983「社会的現実の問題Ⅰ」 1985「社会的現実の問題Ⅱ」 マルジュ社.

————, 1964, *Collected Papers* II *Studies in Social Theory*, Martinus Nijhoff, Hague. 渡部・ 那須・西原訳 1991「社会理論の研究Ⅲ」マルジュ社.

————, 1974, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt — Eine Einleitung in die verstehende Soziologie*, Wein, Springer-Verl., 佐藤嘉一訳「社会的世界の意味構成」木鐸社.

————, 1975, *Collected Papers* III *Studies in Phenomenological Pilosophy*, Martinus Nijhoff, Hague.

Schütze, F., 1977, "Die Technik des narrativen interviews inIntersktionsfeld studien — dargestellt an einem Projekt zur Erforschung von komunalen Machtstrukturen" Unpublished manuscript, University of Bielefeld, Department of Sociology.

Silverman, D., 1993, .*Interpreting Qualitative Data: Methods for analysing talk, text and interaction* London:Sage.

Silverman, H., 1987, *Inscription: Between Phenomenology and Structuralism*. Routledge Kegan Paul, New York.

Smith, J.A., 2003, *Qualitative Psychology: A Practical Guide to Research Methods*. London, Sage.

————, 2004, "Reflecting on the development of interpretative phenomenological analysis and its contribution to qualitative research in psychology", Qualitative Researvh in Psychology, 1:39-54.

Smith, J.A., R.Harré, & L.Van Langenhove, 1995, *Rethinking Psychology*. London, Sage.

Smith, J.A., & M.Osborn, 2003, "Interpretive phenomenological analysis", in J.A.Smith (eds.), Qualitative psychology: a practical guide to research methods, London: Sage, 51-80

Spiegelberg, H., 1982, The Phenomenological Movement, Martinus Nijhoff, Hage, 立松弘孝監訳「現象学運動」世界書院.

Spradley, J.P., 1979, *The Ethnographic Interview*, N.Y.: Holt,Reinhart &, Winston,

Stanghellini, G., 2007, "The Grammer of the Psychiatric Interview", Psychopathology, 40:69-74.

Strauss, A.L.&J.Corbin, 1990, *Basics of Qualitative Research : Techniques and Procedures for Developing Grounded Theory*, Thousand Oaks, California, Sage Publications, 1998, 操, 森岡訳「質的研究の基礎」, 1999, 医学書院.

————, 1994, "Grounded Theory Methodology," in N.K.Denzin, & Y.S.Lincoln, *Handbook of Qualitative Research*, Thousand Oaks,Sage Publications.

Strasser, S., 1969, *The idea of dialogal phenomenology*. Pittsburg: Duquesne Ubiversity Press.

Strauss, C., & N.Quinn, 1997, *A cognitive theory of cultural meaning*. Cambridge, UK:Cambridge University Press.

Tanggaard, L., 1995, "The Research Interview as Discourse Crossing Swords", Qualitative inquiry, 1(1):160-176.

Tiryakian, E., 1965, "Existential phenomenology and sociology" ASR, 30:674-688.

Turner de Sales, 2003, "Horizons Revealed: From Methodology to Method", International Journal of Qualitative Methods, 2(1):1-32.

Van Maanen, J., & S.R.Barley, 1984, "Occupational communities: culture and control in organizations", Research in organizational behavior, 6:287～365.

Van Maanen, J. 1988, *Tales of the Field*: On Writing Ethnography, Chicago, The University of Chicago Press.

Van Manen, M., 1990, *Reseaching Lived Experience — Human Science for an Action Sensitive Pedagogy*, State University of New York Press. London Ontario, Canada.

————, 2002, Phenomenology Online, http://www.phenomenologyonline.com/

Varela, F., 1996, "Neurophenomenology: A Methodological Remedy for the Hard Problem", Journal of consciosness studies, 3(4):330-349.

————, 1997, "Metaphor to mechanism; natural to disciplined", Journal of consciosness studies, 4(4):344-346.

Varela, F., & J.Shear, 1999, "First-person Methodologies: What, Why, How?" Journal of Consciousness Studies, 6(2, 3):1-14.

Vermersch, P., 1994, *L'entretien d'explicitation*. Paris: Editions ESF.

————, 1997a, Approche du singulier. Expliciter, 18

————, 1997b, La référence á l'expérience subjective. Revue phénoménologique Alter, 5.

Wengraf, T., 2002, *Qualitative Research Interviewing*, Thousand Oaks, CA:. Sage.

Weston, C., T.Gandell, .Beauchamp, L.McAlpine, C.Wiseman, & C.Beauchamp,2001, "Analyzing Interview Data: The Development and Evolution of aCoding Sstem", Qualitative Sociology, 24(3):381-400.